

早稲田文学

ほら。鳥居は開かれている。その下を通ればいい。鳥居はあきらかに門だが、そこには錠はない。石で造られた巨大な門だが、施錠などされていない。ほら。一基の巨大な鳥居から、参道がずっと伸びている。子供がそれを眺める。子供はまだ……

¥0

古川日出男

山本動物

good job!
BUNGAKU

WASEDA bungaku FreePaper
Vol.09_2007_03

記録シリーズ・鳥居

古川日出男

フルカワノ速度デフルカワノ的描写フルカワノフルカラ。

高原英理

金原ひとみ

アルベルト・モラヴァ

上野昂志

重松清

中森明夫

さぶろと

Wonderful BUNGAKU

ほら。鳥居は開かれている。その下を通ればいい。鳥居はあきらかに門だが、そこには錠はない。石で造られた巨大な門だが、施錠などされていない。ほら。一基の巨大な鳥居から、参道がずっと伸びている。子供がそれを眺める。子供はまだ鳥居の下を通っていない。通っていいかわからない。子供は独りだ。そして参道の入り口に立っている。男の子だ。ほら。その子の視界。参道の「のびる」様を眺望している。もう少し歩けばまた鳥居があるのを認める。一基の鳥居が。すなわち二基めの鳥居が。そこから歩けばまた鳥居がある。これも一基の鳥居が。すなわち三基めの鳥居が。そこで子供は首を傾げる。たぶん同じ鳥居だ、と認識している。大きさも同じだ、と。しかし参道はただ一つの焦点にむかっている。そのように自身の視界を調整すれば、鳥居は順々に小さい存在と化す。距離と大きさについて子供は考えざるを得ないから、考える。その男児は。ほら。それから距離と時間について。かつて父親が説明した何事かがなかったか？

「お前にとって時間は長い」と父親は語った。ナガイ、と。「子供の一年は長い。大人の一年は短い。生きれば生きるほど、時間は短い、という感触を帯びはじめ。生きるという言葉は成長する、という言葉に置き換えも可能だ。ある時点までは、可能だ。わかるかな？ こう考えよう。あそこにバス停が

あるね？ 一匹の猫があれをめざすとする。結果、到着までにはそれなりの時間を要する。だがお前なら？ お前がめざすとするだろ。半分以下の時間で済むだろ。それからお前より年長の人間なら？ お前より成長した人間なら？ さらに短い時間しか要さないはずだ。なぜならば「ナゼナラバ、と父親は語った。「お前は猫よりも大きいし、大人はお前よりも大きいからだ。これが結論だ。大人になればなるほど、世界はお前にとって距離が短い存在と化する。お前の成長が続いている範囲内ならば、という但し書き付きだが。そして、この厳然とした事実の善し悪しは、お父さんにはまだ言えない」

これだ、と子供は思う。
距離と時間について。

子供は鳥居を通った。ほら。境内に入った。何事かの実証が必要な気がしたのだ。それから子供は一つひとつ、視界に入るものを丹念に眺めて検証する。その材質、その色彩。それらは不均質であり、または均質である。参道の表面はただの石ではないし、境内に繁る樹々は一種類の植物の集まりではない。葉むらが揺れている。「軟風」と称される類いの風が吹いている。ほら。それぞれの葉むらは同じ葉むらではない。色彩に差異がある。一つの葉の形状と葉むらとなった時点での形状にも。そんなふうに子供は検証している。確かめながら歩いている。観察しながら、しかし対象物には不用意に近づかないで。参道を歩みつづけながら。

一メートルを歩むのに三分はかかる。

時間はやはりその子のまわりでのびている。あるいはその子供の周囲で。視線がふられている四方八方で。

それから視線とは違う感覚の方位も。

ある。

異なる五官に属する何かの線も。

ある。

ほら。だから、たとえば耳の線。子供はこの瞬間にも何かを聞いているのではなかったか？ 意を決して通り抜けた鳥居の、置き去りにされたむこう側の音とか。そこには車道があった。わずか二車線だが車道は車道だった。それ

なりの通行量を誇った。一分間に三台か、四台か。それは男の子にとっては背後の音だ。だが真後ろとは違う。後方の、右から左、あるいは左から右に移動する。すなわち耳から耳に。現われては消える。そうした音響の、線。聴覚のための方位。あるいは……。ほら。今度は瞬時にして方位が奪われる。鳥が鳴いたから。その子の頭上で。正確には頭上の、左耳の勢力圏で。それも前方に二十度、より左に三十度傾いた箇所。鳥は一羽だけだ、と子供は検証する。チチッタチツと鳴いてる、と子供は検証する。

姿は確認できず。

すなわち視覚は無効。

しかし聴覚は有効。だから子供は確信する。鳥だ、と。

続いて思う、文脈を跳躍させて、僕のお母さんは鳥だ、と。

その男児は幼児語では思考していない。

そして考える。目と耳の方位について。ほぼ直線に「のびる」参道の線に対して、方向はいかに位置づけられるか？ あるいは、二基めの鳥居と三基めの鳥居は、視野において大きさを増したか？ ほら。子供は考えている。この境内にただ独り、いて。歩いていて。ここが名前のない土地だったら比類のない素晴らしさも生じただろう。しかしながら名前はある。この地には名前が。方位があればそれは存在してしまうのだ。あらゆる地名を放棄し、あるいは喪失したとしても、この土地には最後に大きな名前が残る。なぜならばこの境内を歩いている男の子は日本語で思考し、つまり日本語で記憶して、あきらかに日本列島にいま現在いるからだ。この列島に存るからだ。ほら。日本。この国家には中心が仮定されている。その中心に対して、ここは東北の位置にある。たとえば南西に位置している島々は「南西諸島」と命名されており誰も疑いをさしはさまない。そして、ここは。ほら。

東北。

名前は付いた。方位からは、逃れられない。

子供は幼児語では思考しないが、幼児語でない日本語では思考する。かつ日本語の東北弁でも思考する。かつ日本語の東北弁でも記憶する。思考の記憶と、音声の記憶と……。それに照らすならば東北はこのように響いた。

東北。

濁音は響いた。子音が声帯の振動をともなった。語尾における、その歪み。語尾における、その太さ。それらの、記憶。東北。ほら。そして子供は記憶するがあらゆる記憶を保持しているわけではない。一歳の頃の記憶は？ ない。二歳の頃の記憶は？ ない。三歳の記憶はある。四歳の記憶はある。五歳の記憶はここにある。ンだって僕は五歳だが、一人で歩けが。そのような思考と、この刹那に観察された事象のもろもろの記憶。いま、ここで——この境内で——参道をたしかに独り、歩みながら。と同時に、一メートルを歩むのに三分をかけながら。ほら。検証すなわち観察を続けている子供をその目の外側から観察するならば、いかに記されるか？ その外見は？ 一。頭髮が長い。日本の「現在」の文化の基準に照らせば、男児としては長すぎる。肩よりも下にのびている。肩の線の下方に。二。日中にも薄暗い杜にあつて、子供の双眸はららんと輝いている。まるで真夜中の猫の、小判のように光線を反射する両の眼のように。以上、描写はこの二点で終了するだろう。それ以外の外見の特徴は、この二つの前では、霞む。

そして子供の目の内側に戻る。

参道の両側に子供は灯籠を認める。子供は灯籠の間隔を測る。

参道はほとんど産道に似ているが、そうした連想はしない。社務所を認める。人影はない。ないことを認める。

ここには僕しかないんだ、と思う。日本語で。ここには僕がいねんだ、とも思う。日本語の東北弁で。ほら。言語にすら方位が定められている。その名前にすら方位が刻まれて。ほら。

東北。

二基めの鳥居に接近している。その巨大さに息を呑む。やっぱりと。一基めと同様の大きさを有していたので。やっぱりと。それから触れる。鳥居の柱に。右側のそれに。石の感触だ。冷たい。触覚がめざめる。それから嗅覚が。匂い。嗅いでいる。雨の匂いにする？ これはノーマルな石とは違う匂いだ、と直観して、衝撃を受ける。その事実はあまりに大きい。大きい。

時間が長い。

やや自失してから、男の子はやつと、どうして自分が鳥居に惹かれたかを了解した。それは妹のせいだった。男の子のきょうだいの。似ていたのだ。だから、これが——鳥居が——参道に建ち並んでいる鳥居が。この頃、気がつけばいつも妹の作っている存在と。妹が建材にしているのはマッチ棒だ。あるいは爪楊枝だ。それからご飯粒を糊みだいに利用して。できあがると庭に植える。違う。建てる。列にして。

まるでアリの通り道にこれを作っているみたいに、と男の子は思う。

思った。

アリは、蟻だ。

これとは、鳥居だ。

これは三個だけだけど、とそれから兄である男の子は思う。ンだから三個だけだっちょも、と参道から二基めの鳥居を見上げて、思う。自分の妹のはそうではないと区別する。そのようには限定されていないと結論づける。つねに二桁の数が作られて、建てられて、列をなす。そだ、とその子は思う。仰視には一つの驚愕がともなわれる。真下からだとまるつきり違う形に映るのだ。鳥居が。ほら。それは穹を区切る線である。しかも微妙に二重にぶれている。貫となつている柱の裏側は、石の色が新しい。新しい？ その子は自分がいま捕まえた感触にためらう。新しいっていうのは時間？ だったら……。考えざるを得ない問いが三つ、順々に現われた。まずは時間と距離。それから大きさと距離、それから大きさと時間。男の子は三つめの鳥居を前方に見て、後ろにあるはずの一基めの鳥居をふり返ることはせずに想起した。どちらが小さいのか——視界の内部で？ そして——どちらの時間が長いのか？

境内にトイレがある。それを目が認める。人影はない。気配もない。社務所といっしょだ。

それから手水舎を認める。

そう、あれは、と子供は思う。水を手にかけたり、飲んだりする場所だ、と思う。それから、飲む？ と思う。飲むんだっけが？ 男の子は首を傾げる。傾げると長い頭髮

が揺れる。ザワツと。それから男の子は、違う、と結論づける。吐き出すが、違うべ。自らの記憶の内側の映像に照らして、そのように答えを出した。あれは飲んではいない、と。

らんらんと輝いている双眸の奥で。奥処で、映像を確認して。

そして、その思考には濁音が響いている。

歪みと太さを有して。

「そだげっちょも、お水があつてお、い、い、あッたら、他に欲のはお弁当だけだべ」と言う。声に出して。独り、境内で。ねえお母さん？ と続けて思う。脳裡の虚像としての母親に、同意を求める。

独り、境内で、しかし子供は歩みを中断させない。ほら。歩いている。三基めの鳥居も通過した。そこから先には建っていない。鳥居はない。代わりにあるものは——狛犬、それから賽銭箱、それから拝殿。それから、さらに後方に建てられている見えない神殿。組みになった狛犬のあいだを通る時には一メートルを七分の速度で歩いた。狛犬に対して子供は何ら含むところはなかった。ただし、犬だとは認めない。食肉目イヌ科の哺乳類の一品種だとは。ただ単に怪しい動物だと認める。右側の台座に座る狛犬と、左側の台座に座る狛犬がそれぞれわずかな違いをポーズに孕ませているのを検証した時は、少しばかり苛立たしかったが。賽銭箱。

拝殿。

大きな鈴を鳴らすもの。

拝殿には階段があつた。のぼった。いちばん上に。施錠された扉があり、それはあきらかに「ここから奥には、入るな」と厳命していた。しかし扉には格子窓がある。しかもガラスが嵌め込まれている。透明で、殿内を覗けた。だから子供は覗いた。その目で。いちばん遠い中心点を最初に見た。参道がただ一つの焦点にむかつて「のびる」様を思い返して。むしろ、その焦点をめざして自分は歩みを進めてきたのだ、と確信して。するとそこには鏡があつた。円い鏡が。一面の。大きな鏡が。そこにはそれが飾られていた。まわりには玉串を侍らせていた。子供は玉串を玉串

とは認識しなかった。葉っぱと白い紙、とみなした。その認識そのものには誤謬はない。葉っぱを柵のものとまでは分別できなかったが。しかし、その子には玉串など、どうでもよかった。問題は鏡だったから。参道の焦点。ただ一つの。中心点。その表面は温度を感じさせない。冷たいはずなのに、と子供は不思議に思う。それから視界の絞り込みに入る。グツとその鏡を観察することだけ集中する。つまり子供のらんらんたる双つの瞳も焦点をそこに合わせた。右目も左目も。いや、右目と左目で。立体視して。すると鏡の内側には観察者たる子供自身がいて、その背後には、延々と伸びている参道があつた。

参道が映っていた。

もう一つの参道が。

そこには三基の鳥居がある。いや、そこにも。いちばん遠いのは、いちばん小さな鳥居だ。ほら。鳥居は順々に小さい存在と化して。現実の参道のお終い、涯としての拝殿の内部に飾られている鏡の内部で。ほら。その参道の焦点としての一面の鏡の内側の世界のいちばん遠いところに。ほら。あの鳥居が。

子供は思う。それって通れる？

子供は思う。それって遠い？

子供は思う。その時間がいちばん長いのか？

ねえお父さん。それから、ねえお母さん。あそこには僕がいるね。鏡のいちばん手前に。これはとても危険な現象です。子供は思う。幼児語からは遥かに遠い語彙で。しかしその思考に用いられるのは日本語であり、かつ日本語の東北弁にも柔軟に変化した。ほら。東北。

子供は言う。「ンだから離れっぺ」

施錠された扉から離れる。拝殿のいちばん上の階から、降りる。賽銭箱からも離れる。それから拝殿の側面に回った。すると男の子は、発見した。五角形の板絵にまといつかれる樹木のようなものを。まるでクリスマス・ツリーのようで……異様な具合に大量の板絵が折り重なっている。たぶん数百枚、数千枚の板絵が。しかも樹木は一本だけではない。子供は数える、四本……五本。六本。近づいている。その五角形の板絵は、絵馬だ。しかし男の子には絵馬

を「絵馬」と認識する力がない。いや、知識がない。単純にそれが不足していた。だから接近して、触れて、読む。今度は五官とはつながらない力を発揮した。書かれている望みを読むこと。絵馬に記されたあらゆる願いを。

その子は読めた。平仮名と片仮名はむろん、相当数の漢字まで。わずか五歳だが、すでに読み書きができた。そのレベルまでの。

子供は思う。祈り？

子供は思う。ここに祈りが書かれているの？

子供は思う。いろいろな祈りが書き記されて記録されているの？

いろいろな人の、それが？ そうだよ。いろいろな人だっていうことは、わかる。いろいろな名前があるから。祈りだっていうことは、わかる。合格したいとか、治りたいとか、書いてあるから。だとしたら、このいろいろな人たちはまだ合格していないし、まだ治っていません。治りたい部分が、病気なはず。子供は思う。

思って、吊られた絵馬を手にする。一枚。また一枚。そこには記録された現在がある。合格をめざしている現在や、治癒を求めている現在が。

書き記された「いま現在」の記憶が、記録として残っている。

その強烈な、記憶と記録の、樹木。

書けば実現する望みを託した、ツリー群。

一枚の絵馬を裏返す。そこで初めて、子供は、裏側が表側で、そこには鳥居が描かれていることを認識する。それはその神社の、標しだ。

それから子供は、ツリー群のかたわらに、用意されたペンがあることを発見する。いつでもそれを使用しろ、と油性の黒ペンが。何本か。

子供は言う。「これで書いたんだない？」

ほら。それからその子は順々に行動する。その男の子は。一。ペンを手に取る。二。ペンの蓋を外す。三。いちばん隙間が空いていそうな絵馬を探す。四。結局、絵馬の表側を書き込むための場所とする。だから、描かれた鳥居のそばを。五。まずは自分の名前を記しはじめる。そこに。姓



古川日出男◎ Furukawa Hideo
66年生。小説家。06年にもっともブレイクした男。刻々と作品や書き手自身のバージョン・アップが続く現在は55歳。その圧倒的な速度を追うのは、読み手にとってもはや恍惚。現在は「すばる」「青春と読書」ほかで二千年に及ぶ東北ザイガを執筆中、各所で行われる朗読ギグも圧倒的。期間限定公式サイトは <http://www.shueisha.co.jp/furukawa/>

と名を続けて。ほら。冠木秋と。

まずは名前を記録した。その五歳の男児は。姓が冠木。これはカブキと読む。名が秋。これはアキと読む。

姓とはかばね。

そして名には、意味が。

「お前は春に生まれたから」と母親は語った。「秋って名前にしたの。お前には鳥の名前は要らないのよ。それからお前の妹にも。ね？ お前の妹は冬に生まれたから、夏って名前にしたの。だからあの子は夏で、お前は秋」ナツデ、と母親は語った。オマエハ、アキ、と母親は語った。「冠木秋と、冠木夏」

それで僕は何かを書こう？

こう書いてみようか？

時間の長さが極限に達しますように。書いてみっかい？

子供は試す。その願いをまさに書き記す。それは「いま現在」の祈りの記憶であり、記録される。すでに描かれている鳥居とともに。これが順々の行動の、六。それから、七。子供は「そうだ、鳥居は？」と声に出しながら、思う。いちばん最初の鳥居であり、拝殿に飾られた鏡の内側では、いちばん小さい鳥居のことを思い起こす。それで、ふり返る。参道のはじまりを。起点を。子供は拝殿の側面に回っていたから、参道の線からは外れている。線に対して角度がついていて、その現実が、一基めの鳥居を完全に開かれた門として視認させる。障害物なしに。すると、見える。ほら。第一の鳥居のむこうで。かつては車道が存在していたその門の彼方で。ほら。鳥居の門の形に割り貫かれたように。

風景が変わる。ほら。

(一)

金井美恵子&金井久美子、最新刊刊行&展覧会開催!

『楽しみと日々』4月中旬刊行

金井美恵子／金井久美子

平凡社刊／定価1945円(税込／予価)

問い合わせ先:平凡社

〒112-0001 文京区白山2-29-4泉白山ビル

TEL:03-3818-0698 FAX:03-3818-0732

<http://www.heibonsha.co.jp/>

金井久美子作品展

「楽しみと日々——オブジェとタブロー」

会期:2007年5月14日(月)～25日(土)日曜休

営業時間:10時～19時(土曜18時半まで)

会場:村越画廊

東京都中央区銀座6-7-16 並木通り岩月ビル8階

TEL:03-3571-2880

<http://www.hangarou.com>



© Kumiko Kanai 「バルサ・キャット」2006

金井姉妹、待望の映画エッセイとオブジェ集

わせだぶんがくゼロごうでません。
よんがつはうそです。
もうでなくていい。

だぶりゅうびーもあたらしくなる。
ろくがつだそうだ。
そんなさきのことわしらん。

「早稲田文学」第10次0号 07年4月発売予定

「WB vol.010」第2期リニューアル号 07年6月配布予定

ハイブリッド・クリエイティブ

脱構築を最低の鞍部で超えないために

大杉重男

Osugi Shigeo

少子化問題に取り組むと称する大臣が「女性産む機械」と発言したというので物議をかもししたが、この発言が「女性産む動物」だとしてもやはり反応は同じだったろうか。東浩紀と北田暁大の対談『東京から考える』を読んでそんな連想が起きた。この本は世代（1971年生）も育ち（東京の南西の郊外）も大学（東京大学）も同じ哲学者と社会学者が、それぞれの体験を踏まえつつ東京という都市の現状を語り合い、そこから現代思想を考えるという内容のものである。東京が経済的文化的に西高東低の構造を持つことは、磯田光一の東京論など昔から指摘されて来たことだが、この東西の格差構造が現在も続いており、強化されつつあることが、この本でも具体的な資料によって明らかにされている。そして共に豊かな「西」側の出身で格差の上位に位置しながら、東が「西」側の感性を擁護し、グローバリズム的な東京の均質化を積極的に肯定するのに対し、北田は「東」側の感性を代行し、東京の多様性・複数性を保存することを主張する。

両者を比較すると、東の方が論理的に首尾一貫して明快であるのに対して、北田の方は自身認めているように、その「東」側へのコミットメントの身振りがサブカルチャー的な美的鑑賞の対象としての「下町」的イメージへの感傷的なノスタルジーに過ぎないのではないかと受け取れそうな弱さと曖昧さがある。たとえば争点の一つになっている下北沢の再開発問題にしても、再開発反対派の論理が「サブカル都市下北沢を守れ」といったある種のオリエンタリズムの変奏になってしまっているのではないかとという疑問に北田が説得的に答えているようには見えない。かつて坂口安吾は日本の伝統美を賛美するブルーノ・タウトの日本文化論を徹底的に批判し、現前する生活に必要なものだけが意味があると主張したが、東の北田に対する態度は、より友好的であるとはいえ基本的には安吾のタウトに対する態度を反復する。

しかしそれを確認した上で東の次のような発言は問題である。「人間は動物であり、快楽と暴力に弱く、男女がセックスして子どもを作る。子どもは女性しか産めず、知能には一定のばらつきがあり、合理的判断に限界がある。これはもうどうしようもないことです」。

ここに現れる「動物」という言葉は、東の言説のキーワードの一つである。それはそもそもデリダによるハイデガー読解（『精神について』）に由来する。ハイデガーはある講義録で、「世界がない」存在としての「石」と「世界を形成する」存在としての「人間」の中間形態として「世界が貧しい」存在としての「動物」について語っているが、デリダはこの言説において「動物」が「人間」の下位に置かれていることをとらえて、そこにハイデガーが批判していたはずの人間中心主義への回帰を見た。デリダによればハイデガー思想がナチズム的優生思想に取り込まれたのはそれがアンチヒューマニズムだったからではなくヒューマニズムからの離脱が徹底していなかったからである。初期の東はこの「人間」「動物」「石」の区別をラカンの「象徴界」「想像界」「現実界」の三分法に対応させて理論を展開させようとしたが（『想像界と動物の通路』）、その後萌え画像に自動的に発情するオタク的動物（『動物化

上野昂志の戯言人生

副校長業務連絡

③「わからない」ものはいらない、あるいは空無化する時間

黒沢清の『叫（さけび）』は、昨年、公開された『LOFT』以上の傑作である。わたしは、これを昨秋の「東京フィルムメックス」で見えて、いたく感動したのだが、映画館でもぜひ見たいと思っている。幽霊が、凄じ悲鳴を上げながら出てくるが……そんな幽霊は、映画史上ほとんどいなかったのではないかと……、刑事の役所広司が、それに負けまいと悲鳴を上げるのが、おかしい。ここでは、映画を論じるつもりはないので、あえて、こういう言い方をしようが、この作品のテーマは、一言でいえば、記憶と時間ということになるだろう。人はよく、思い出したくないこと、というような言い方をするが、たいていの場合は、自分に都合の悪い過去は忘れてしまおうではないだろうか。あるいは、都合の良いように変形してしまうとか。

『叫（さけび）』では、そんなふうにして、記憶から消し去った過去が、そうはさせじと時を乗り越えてやってくるのだ。これは、むしろ、歴史問題などに対する暗喩としても読むことができるが、映画はむしろ、見る人一人ひとりに、あなたにも、そうやって忘却の彼方に押しやった不都合な出来事があるのではないかと、と直接に揺さぶりをかけてくるような感触がある。

だが、こういう作品でも、人によっては、「わからない」といわれてしまうのだろう。『LOFT』の宣伝をやっていた女性は、一般試写をやったあとに観客からアンケートをとったら、「わからない」という回答がほとんどで、アンケートなんてとらなきゃよかったと腐っていたが、こういう反応は、いまでは常態化している。それも、一般観客などではなく、映画ライターを自称する連中でも、平気で「わからない」といい、しかも、そのことに平然と居直って、自分に「わからない」作品が悪いとでもいったげな顔をする。これは別の友人の話だが、間もなく公開されるロバート・アルトマンの遺作『今宵、フィッツジェラルド劇場で』（これもアルトマンらしい快作で、こういう作品を遺作として残し得たのは、なんと幸せなことだろう）のような映画でさえも、「よく、わからない」といつてきたりするというから、そうなる、もう、返す言葉もない。こういう現象が目につきたしたのは、十年ぐらい前からだと思うが、当時は、わからなければ、わかるまで何度も見るよ、といったり、もっと勉強しろよ、などといった。しかし、いまや、そんな言い方は通用しない。彼らは、「わからない」ということを、まるで勝ち誇ったようにいつて、切り捨てるからである。

これは、しかし、映画や小説に対したときに限らない、ある種の心的な傾向として一般化しているようなのだ。なぜ、そんなふうになったのか、いろいろな要因を考えてきたのだが、内田樹の『下流志向』を読んで、なるほどそうだったのかと、「わかった」。内田は、何年か前に、自分のゼミで実験した結果、学生たちが、幾つもの知らない言葉をスキップしながら読んでいることに気づいたようなのだが、それによれば、彼らは、「自分の知らないこと」は「存在しない」とにしている「らしいのである。つまり、「どこかの段階で、『意味のわからないもの』が彼らの世界で意味を失ってしまった」ということなのだ。

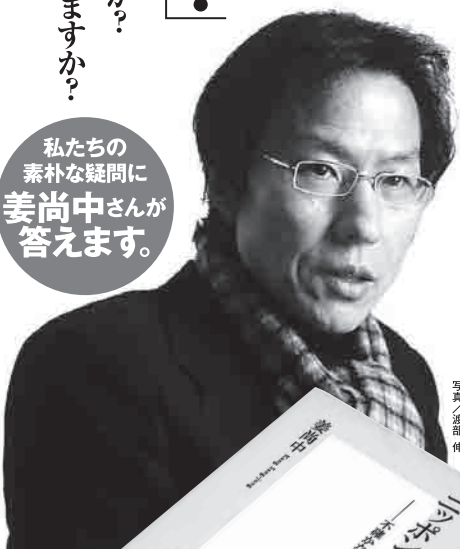
だから、学生たちは、平然とというか、むしろ当然の権利のような顔をして、「現代思想を学ぶことの意味は何ですか？」などと問いかけてくるのだ。それが小学生ならば、教師が文字を教え

集英社ホームページの好評連載が本になりました！

「姜先生、自由なのに息苦しいのはなぜですか？」

・「お金」を持っている人が勝ちですか？
・「仕事」は私たちを幸せにしてくれますか？
・どうしたら「平和」を守れますか？

私たちの
素朴な疑問に
姜尚中さんが
答えます。



写真：渡部伸



発売
大反響

カン サン ジュン
姜尚中

ニッポン・サバイバル

不確かな時代を生き抜く10のヒント

お金、仕事、友人関係…幅広い世代からの素朴な疑問と誠実に向き合い、今の時代を「まとも」に生き抜く方法を10のテーマを通して考える。注目の政治学者の思考に触れる、最も分かりやすい1冊！ ●定価735円

●好評既刊 姜尚中の政治学入門 ●定価693円

集英社新書

●インターネットでも集英社の書籍、コミックスが購入できます。書店受取なら送料無料。books.shueisha.co.jp
●集英社新書HP shinsho.shueisha.co.jp ●定価は税込みです。



大杉重男 ◎ Osugi Shigeo

65年生。主要著書『小説家の起源——徳田秋声論』『アンチ漱石——固有名批判』。最近『ハヤテのごとく！』にはまっている。ファンのブログによれば「スーパーハイブリッドコミック」だそうだ。



『東京から考える
一格差・郊外・ナショナリズム』
(日本放送出版協会)

するポストモダン」から郊外で生殖のために発情するヤンキー的動物（本書）へと関心が移る中で、いつのまにか「動物」という概念を具体化し、デリダからハイデガーへ退行して行つたように見える。もちろんその時東は「動物」の側に共感を表明するが、同時に侮蔑的ニュアンスをそこに込めるので、北田から無用の人間主義的反発を引き出して不毛な対立を引き起こしている。

この本では「脱構築」が見くびられ過ぎていて。少なくとも「土地がいくら脱構築されても、誕生は脱構築されない」といった発言には同じがたい。日本人が子供を産まなくなつてもその欠落は外国人の子が代補するだろうし、人類が子供を作らなくなつても、それこそ他の本当の動物が代補するだろう。土地との比較で考えても、「人間工学的」に快適なヤンキー的生殖空間は「街の記憶」が「犠牲」になることで作り出されているのであり、その意味では生殖による血の継承は「街の記憶」の代補と考えられもする。それに広い道路ができ、高いビルが乱立したからといって「街の記憶」が簡単になくならない。私は東京の大塚に生まれ育つたので池袋に行く時よくサンシャイン60ビルを通つたが、かつての巣鴨拘留所の痕跡は何もないにもかかわらず、荒涼殺伐とした空気は変わらな立ちこめていた。そして何より東京の中心にある皇居、本書では言及されることのないこの豊かな「自然」が残されているとされる空間がアスファルトで均され、ビルの群に埋め尽くされない限り、他の場所がどのように壊されても土地が脱構築されているとは言えない。あ

ようとする、「先生、これは何の役に立つのですか？」という質問になる。つまり、意味がなければ、あるいは、何の役に立つかはつきりしなければ、学ぶ必要はない、というわけだ。そうした原因を、内田は、諏訪哲二の「オレ様化する子どもたち」などを援用しながら、現代においては、「子どもたちは就学以前に消費主体としてすでに自己を確立している」ということに求めているが、「消費主体」であれば（消費者は王様！）、自分にとって意味のないもの、役に立たないものは、買つてやらない、ということになる。「わからない」ことが、畏れや興味をかき立てるものとしてあるのではなく、たんに価値のないものとして切り捨てられるのである。

内田樹のこの本は、学ぶとは何かという教育論であり、また、働くとは何かという労働論でもあるが、そこに通底しているのは、消費という「無時間的な行為」から、いかに時間を取り戻すかという問題であろう。そして、これは、やや強引に言えば、黒沢清の『叫（さけび）』のテーマとも重なってくる。幽霊は、時間を超えてやってくるが、幽霊の正体を知るには、時間を遡行するしかないからだ。しかし、幽霊には、わからないなりに人を脅かす力があるのが羨ましい。ところで、先日、日本ジャーナリスト専門学校でやった説明会に、高校二年生の女子が二人で来たので、二年生なのに、ずいぶん早いね、といったところ、彼女たちの学校では、入学早々から、早く進路を考えなさいといわれ、三年生の学期はじめには、どこに進むか決めさせられるというのである。いまだ高校教育が空洞化しているなどというつもりはないが（それをいうなら、小学校からだろう）、そこでも、時間はただ、次のステップのための踏み台として消費されるだけなのだ。そして、そのあとに大学や専門学校は、次なる就職のためのステップではない。あ



上野昂志 ◎ Ueno Kouichi

41年生。批評家。短く切味の鋭い批評で映画・写真・文学・社会を捉え続けている。鈴木清順監督の映画『ストロオベラ』にも出演。主著『戦後60年』など。
<http://www.amudesu.co.jp/tasogare/>



▼雑誌「早稲田文学」が「WB」に生まれ変わって1年半、最後の雑誌版からちょうど2年を経て、この春、あたらしい雑誌「早稲田文学」第十次（ぐらい）0号をつくることになりました。「復刊できてよかったね」的なめでたさよりも、近い将来の定期刊行にむけての実験航海的な意味合いのつよい0号ですが、「WB」の誌面の制限を超えた強度の創作・評論を準備しています。以前の雑誌「早稲田文学」を愛読してくださった方々も、「WB」で初めて出会えた方々も、どうぞこの春うまれる「0号」を手にとって見てください。全国書店、および通信販売にて発売予定です。

▼雑誌が復刊すると「WB」はどうなるの？とよく訊かれるのですが、設置場所を提供して下さる方や、手にとって下さる皆様に支えられて、「WB」は今後も続きます。区切りの10号は、デザインや一部連載をリニューアルして、6月下旬の発行予定です。

▼両表紙と奥付対向の写真を担当してくれた、松隆浩之氏とのコラボも、この9号でひと区切り。今号は、師・森村泰昌氏ゆずりのセルフポートレイトの大集合です。表紙の「美人画シリーズ」のトリを飾る迫力美女は……。しげしげとご覧下さい。重松清氏の巻頭インタビューもひとまず今回で最終回。粉骨砕身、両表紙を飾り続けてくださったおふたりに、深い感謝をお伝えしつつ、遠からぬ再登板をお願いします。(ic)

▼モブ・ノリオ氏の「絶対兵役拒否宣言」はお休みです。

▼雑誌「早稲田文学」0号、および「WB」第2期の予定や進行状況は、www.bungaku.net/wasebun にて。広告のご出稿や配布場所のご提供も、かわらず募集しております。よろしく願いいたします。

Shock!! Issue vol.09

Waseda Bungaku Free Paper

WB

2007年3月15日発行（隔月刊）

Published by 田島照久

Edited by 芳川泰久 (Editor in Chief)

青山南 村田知嘉子
江中直紀 佐伯悠
貝澤哉 小倉潤也
十重田裕一 島津沙都美
三田誠広 寺井砂ゆ
山本浩司 木村安希子
下田桃子
武川薫月
近藤景亮

朴文順
市川真人 (Concept & Direction)

Special thanks to 青木誠也 中村太一

Design 奥定泰之

Photograph 松隆浩之 (p1,8,24)

編集・発行 早稲田文学会／早稲田文学編集室

169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-7-10

TEL/FAX 03-3200-7960

Mail wbinfo@bungaku.net

印刷 凸版印刷株式会社

174-8558 東京都板橋区志村 1-11-1

TEL 03-3968-5188

FAX 03-3968-5409

http://www.toppaan.co.jp/

日本語による文学・哲学・芸術表現の普及をめざすフリーペーパー「WB」では、主旨に賛同・応援して下さる個人や企業の皆様からの広告出稿や配布場所提供等によるご助力を求めています（広告収入は部数と配布箇所拡大に用いられます）。関心をお持ちになった方は小誌編集室までご一報頂ければ幸いです。

「WB」バックナンバーは小誌サイト www.bungaku.net/wasebun で公開中。定期購読もお申し込みいただけます。

「WB」は、店舗・公共施設など様々なスペースを運営している方々による設置場所のご提供と、各店舗へのお願いに力を貸して下さったみなさまのご協力により、下記のところで配布されています（2007年3月現在）。

◎設置協力……【北海道】ブックオフ網走店／代々木ゼミナールライブラリー札幌店／DOZE／ブックオフ伏古店／北海道大学生協／北海道大学生協書籍部
北部店／札幌大学生協／三省堂書店大丸札幌店／東京旭屋書店札幌店／リーブルなわ／喜久屋書店小樽店／いわた書店／oasisZO【青森】成田本店しんまち店／ブックスアメリカン浪館店【岩手】ブックオフ岩手花巻店／ブックスアメリカン北上店／東山堂三ッ瀬店／LIFE&ART 青空【宮城】ブックオフ宮城利府店／代々木ゼミナールライブラリー仙台店／ジュンク堂書店仙台ロフト店／あゆみブックス仙台店／金港堂石巻店／紀伊国屋書店仙台店／ジュンク堂書店仙台店【秋田】秋田県立図書館【福島】ブックオフ郡山桜通店／宮脇書店ヨークタウン野田店／福島県立図書館【茨城】ゆうき図書館／潮来市立図書館【栃木】宇都宮ビジネス電子専門学校・宇都宮アート・スポーツ専門学校／紀伊国屋書店宇都宮店／喜久屋書店宇都宮店【群馬】シネマテークたかき／戸田書店前橋本店【埼玉】埼玉県立久喜図書館／早稲田大学生協所沢キャンパス店／ジュンク堂書店大宮ロフト店／さいたま文芸館／寄居町立図書館【千葉】浦安市立中央図書館／紀伊国屋書店松戸伊勢丹店／代々木ゼミナールライブラリー津田沼店／ときわ書房本店／ときわ書房本八幡店／千葉市立中央図書館／佐倉市立佐倉図書館／千葉県立東部図書館【東京】武蔵野美術大学／古書往来座／日本近代文学館／東京都江戸東京博物館／東京堂書店／有隣堂書店目黒店／有隣堂書店アトレ恵比寿店／有隣堂書店亀戸エルナード店／有隣堂書店ルミネ町田店／早稲田大学コーププラザブックセンター／風花／文鳥舎／青山ブックセンター／青山本店／青山ブックセンター六本木店／青山ブックセンター自由が丘店／早稲田大学エクステンションセンター／丸善丸の内 本店／竹隆岡岡塾／早稲田大学大隈会館 1F／ブックオフ福生店／代々木ゼミナールライブラリー本店／ハートランド／CAFE SEE MORE GRASS／combine／cafe retro／トリックスター／BERG／アップリンクファクトリー／中野書店／JAKE HOUSE／JAKE'S GALLERY 銀座店／町田市立中央図書館／成文堂早稲田駅前店／犀門／古書ほうろう／早稲田大学豊島山キャンパス店／三省堂書店神田本店／ブックファーストルミネ2 2店／HAGA／紀伊国屋書店新宿本店／am/pm 豊島要町店／早稲田松竹／信愛書店／高円寺文庫センター／下板書房／囃囃舎／セッションハウス／都立多摩図書館／青年劇場／ブックファースト大井町店／文鳥堂書店牛込本店／リプロ池袋バルコ店／錦金港堂書店／オリオン書房／ルテ店／三見堂本店北野店／ジュンク堂書店池袋店／あおい書店高田馬場店／模索舎／書原杉並店／中目黒ブックセンター／有隣堂書店新宿店／増田書店北口店／政文堂／ブックファーストルミネ新宿 1 店／リプロ池袋本店／紀伊国屋書店新宿南店／文教堂書店渋谷店／リプロ光が丘店／近藤書店朝日店／文教堂書店霞ヶ関店／東京ラングムワーク赤坂店／東京大学消費生活協会の書籍部／あおい書店新宿店／ジュンク堂書店プレスセンター店／東京学芸大学生活協同組合／放文社／あゆみ Books 八王子店／くまざわ書店錦糸町店／オリオン書房ルミネ店／三省堂書店八王子店／ジュンク堂書店新宿店／東京旭屋書店水道橋店／有隣堂アトレ大井町店／往来堂書店／紀伊国屋書店玉川高島屋店／オリオン書房アレア店／ブックガーデンティラ上野店／リプロ渋谷店／芳林堂書店／駒草書林／紀伊国屋書店国分寺店／こまばアゴラ劇場／JAZZ ベーバーむーん／書肆アクセス／西秋書店／Pois e' / システム販売株式会社／二松学舎大学付属図書館／流水書房／フィクショナル／紀伊国屋書店成蹊学園ブックセンター店／宮本スタジオ／武蔵野大学学生生活課／寿司・磯料理西川／文化学院図書／日本大学芸術学部文芸学料科資料室／カプエダス／旭屋書店池袋店／三省堂書店町田店／BOOKS 隆文堂／八重洲ブックセンター／ユーロスペース／くりっくチケットセンター／創英社／武者小路実篤記念館／ウッディン
アター中目黒／Ｙショップひまわり／オフィス然 nature／丸善立教学院店

【神奈川】有隣堂書店本店／有隣堂書店横浜駅西口店／有隣堂書店ルミネ横浜店／有隣堂書店ウイ橋本店／たらば書房／ダムトラックスカフェ／代々木ゼミナールライブラリー横浜店／藤沢市南市民図書館／葉祥明美術館／神奈川近代文学館／丸善横浜ポルタ店／栄松堂書店ジョナス店／啓文堂書店相模原店／紀伊国屋書店横浜店／藤沢市湘南大庭市民図書館／藤沢市辻堂市民図書館／藤沢市総合市民図書館／有隣堂書店厚木店／栄松堂書店ジョイナス店／横浜市民中央図書館／鎌倉文学館【新潟】代々木ゼミナールライブラリー新潟店／知遊堂赤道店／知遊堂三条店／本の店英進堂／戸田書店新潟南店／北光社／新潟県立図書館／ジュンク堂書店新潟店【石川】岩本清商店／コラボン／あうん堂／金沢美術工芸大学／金沢 21 世紀美術館／金沢シネモンド／ギャラリートネリコ／リプロ金沢店／ヴィレッジ・ヴァンガード金沢ラフロ店／うつつのみや柿木島店【福井】仁愛女子短期大学附属図書館【山梨】山梨県立文学館【長野】ブックオフ飯田かねえ店／平安堂書店諏訪店／リプロ松本店／平安堂書店安曇野店／平安堂書店長野店／平安堂書店川中島店【静岡】ブックオフ静岡流通通り店／谷島屋書店静岡本店／戸田書店藤枝店／戸田書店静岡本店／佐藤書店／谷島屋書店新流通店／魚鯨【愛知】kinder book／代々木ゼミナールライブラリー名古屋店／三省堂書店名古屋高島屋店／ちくさ正文館／名古屋シネマテーク／ジュンク堂書店名古屋店／安藤書店／らくた書店東郷店／ブックセンター名豊緑店／いまじん南陽通店／鎌倉文庫第三店／カルコス小牧店／ウニタ書店／愛知淑徳大学図書館星が丘分館／ブックセンター名豊刈谷店／紀伊国屋書店ラフト名古屋店／愛知県立大学生協書籍部／名古屋大学生協書籍部南部店／愛知教育大学生協 eM 書籍／中京大学生協プラザドット／愛知淑徳大学図書館長久手本館／旭丘高等学校図書館／シマウマ書房東郷店／創宣／スペース樂遊館【岐阜】カルコス本店【三重】宮脇書店四日市本店／宮脇書店鈴鹿店／宮脇書店久居店／三重大学協栄院店／白濁津松菱店【滋賀】滋賀県立図書館【京都】代々木ゼミナールライブラリー京都店／オパール／京都みなみ会館／はせいち新田辺店／京都芸術センターアートスペース／ニュートロン／ギャラリーそわか／三月書房／ジュンク堂書店京都店／立命館生協存心館ブック&サービス／恵文社一乗寺店／ガケ書房／MEDIA SHOP／USED BOOK BEE／京都成章高等学校図書館／ジュンク堂書店京都 BAL 店／ブックファースト京都店／ギャラリーアンテナ【大阪】近畿大学図書館／代々木ゼミナールライブラリー大阪店／代々木ゼミナールライブラリー大阪南店／大阪府立現代美術館センター／大阪シネ・ミュージック／セリヤ書店本店／第七藝術劇場／GALLERY wks.／katarina K／ジュンク堂書店大阪本店／ジュンク堂書店難波店／喜久屋書店阿倍野店／ブックファーストなんばワークス／紀伊国屋書店本町店／リプロ江坂店／紀伊国屋書店梅田本店／大阪アーツアボリア／ナンバ古本文化共栄園／矢野書房／山羊ブックス／天地書房／タワーレコード難波店／岡田書店／古本のオキ／大阪府立中央図書館／こえとことばこころの部屋／タワーレコード心斎橋店／タワーレコード茶屋町店／ブックカフェワールドパンチ／ギャラリー永井／HEP HALL／graf／旭屋書店／喫茶やぶたやジャンプ／NPO 法人彩都メディア図書館【兵庫】兵庫県立図書館／関西学院大学生協書籍部／神戸アートビレッジセンターアートスペース／薬学書館・Begin／海文堂書店／ブックファースト宝塚店／ジュンク堂書店三宮駅前店／ジュンク堂書店三宮店／松蔭中図書館／伊丹市立演劇ホールアイホール／神戸市外国語大学生協／トリノカフェ【奈良】ギャラリー OUT of PLACE／大学堂／倭の国書房／古書喫茶 553／奈良市立北部図書館【和歌山】宮脇書店ロイネット和歌山店【鳥取】米子工業高等専門学校／本の学校今井ブックセンター／青杏文庫／定有堂書店／今井書店吉成店【島根】今井書店グループセンター店【岡山】岡山県立図書館／宇吉堂【広島】ブックオフ広島相田店／フタバ図書 MEGA／啓文社ポートプラザ店／フタバ図書 TERA 広島府中店【山口】宮脇書店宇部店／梅光学院生涯学習センター【愛媛】愛媛大学協栄院北シヨップ／紀伊国屋書店松山店【香川】ギャラリー ARTE【福岡】青山ブックセンター福岡店／代々木ゼミナールライブラリー福岡店／ギャラリー・ブードリアン／Fortuna／丸善福岡ビル店／Fortuna concept／福家書店博多店／ジュンク堂書店福岡店／紀伊国屋書店福岡本店【熊本】葉祥明阿蘇高原絵本美術館／紀伊国屋書店熊本光の森店／熊本近代文学館／熊本現代美術館【大分】大分県立図書館／明林堂書店大分本店／ジュンク堂書店大分店／リプロ大分わさだ店【宮崎】若山牧水記念文学館【鹿児島】ブックジャングル／かごしま近代文学館／川内まごころ文学館【沖縄】ブックオフ那覇小祿店／田園書房宜野湾店【海外】【パリ】パリ日本文化会館／在仏日本人会【ブリスベン】クイーンズランド大学【ニューヨーク】ヴァッサー大学／コロンビア大学【シアトル】紀伊国屋書店シアトル店

設置・配布場所の詳細は、「早稲田文学／WB」のサイト www.bungaku.net/wasebun をご覧いただくか、小誌編集室（TEL/FAX 03-3200-7960）までお問い合わせください。実費（1000 円）による 1 年間・6 冊の直接購読も承っております。また、あらたに設置場所をご提供いただける場合がございましたら、上記連絡先もしくは wbpost@bungaku.net までご一報いただければ幸いです。

広告募集

「WB」では、広告出稿をご希望になる企業、団体、個人および、広告のお取り扱いをして下さる代理店の募集をしています。詳細につきましては、編集室までお気軽にお問い合わせくださいませ。

早稲田文学編集室
TEL/FAX 03-3200-7960
MAIL wbinfo@bungaku.net

旧作異聞⑨



斎藤美奈子 © Saito Minako

56年生。文芸評論家。94年、『妊娠小説』で評論活動をはじめ、他の著書に『たまには、時事ネタ』『それってどうなの主義』など。



『浮雲』(岩波文庫)

というわけで、二葉亭四迷『浮雲』である。

一八八七〜八九(明治十九〜二十一年)年の刊行。言文一致体による本邦初の小説、近代文学の夜明けを告げた作品として知られるが、「読んだことはねえな」って人がじつは多いかもしれない。

主人公の内海文三は静岡の出身、父の死後、東京の叔父の家に居候しながら学校を出、官吏の職も得た。が、国もこの母を引き取ろうと考えていた矢先、役所を論旨免職になる。人減らしが目的のリストラである。娘のお勢と文三の結婚を望んでいたらしい叔母のお政はとたんに態度を一変させ、自分に好意を持っていると思っていたお勢までが冷たくなる。母娘が元同僚の本田昇に急接近するのを見るにつけ、文三は気が気ではない。

「負け組」の文三と「勝ち組」の昇。元祖「悩める青年」である二十三歳の文三と、要領がよくて課長の覚えめでたい昇。そして二人の男の間をひらひらと舞う十八歳のギャル、お勢。わかりやすいお話である。二十世紀の東京を舞台にしたTVドラマに焼き直しても、十分にもつだろう。というより仕事と三角関係がからんだこの図式は、韓流ドラマっぽいかな。

それにしても気になるのは、文三がなぜここまでイライラ、イジイジしているのかだ。お政、お勢、それに昇も加えて団子坂に菊見に行こうと誘われ、自分から断ったくせに彼は思う。

ヤ面白からぬ、文三には昨日お勢が「貴君もお出なさるか」ト尋ねた時、行かぬと答えたら「へーそうですか」ト平気で澄まして落着払っていたのが面白からぬ、文三の心持ではなろう事なら行けと勧めてもらいたかったけれどもなお強情を張って行かなければ「貴君と御一所でなさやア私も罷しましよ」とか何とか言ってもらいたかった……

って、おいおい、それはワガママだろう。コドモじゃないんだからさ。かと思えば、お勢が女中のお鍋や昇とふざけている声を聞いて憤慨する。

実に淫哇だ 叔母や本田は論ずるに足らんがお勢が、品格品格と口癖に云っているお勢が彼様な猥褻な席に連っている……しかも一所になつて巫山戯ている……平生の持論は何処へ遣った 何のために学問をした

ウ、ウザッ。リストラの憂き目にあい、老いた母を呼び寄せる計画も頓挫したのに、こいつったら、新しい職を探すでもなく、復職の口添えをしてやろうかという昇の打診さえ拒否する始末である。彼が気に病んでいることといったら、お勢の一挙一動だけときているのだ。

一方、「根がお茶ッぱい」と記されるお勢は、後世の批評を読むと世俗的な女という悪評がもつぱらだが、教育を受けただけあり、母の意見には逆らうわ、文三や昇とも対等にやり合うわ、この種の小説には珍しい意思を持った娘である。(本田は貴嬢の気に入ったと云うんですか)といやみったらしく問いつめる文三には、売り言葉に買い言葉で「ハイ本田さんは私の気に入りました……それが如何しました」と答え、彼の失礼な態度には「畜生……馬鹿……口なんぞ聞いてくれなくなつたって些ども困りゃしないぞ……馬鹿」とムカつきを隠さない。明治も三十年代になると良妻賢母教育の時代になって、女もつまらなくなっていくが、『浮雲』の舞台である明治十年代の、教育を受けた娘はこのくらい生意気だったのだ。

さて、こんな二人ではあるのだが、内海文三はその後の日本文学に続々と登場してくる「悩める青年」たちと一線を画したところがある。それは「文学」という逃げ場を持っていないことである。

世俗での立身出世には興味が無い、文学で身を立てたい。あるいは世俗での立身出世と文学への道の間で思い悩む。——漱石『三四郎』、鷗外『青年』以下、近代文学の中心に居座る若者たちは、みなこの二つの選択肢の間で揺れ動いてきた。三四郎の場合は「文学」ではなく「学問」だったけれども、あとはほとんどみんな、文学、文学、文学、だ。

ところが内海文三に限っては、その種の逃避、あるいは別の道での上昇志向が見られないのである。そろそろだろう。だって文三の前に、まだ人生をかけるほどの「文学」はないんだから。『浮雲』自身が近代文学の開祖なんだから。「負け組」の敗者復活戦としての文学がない！ だから文三はプライドを持て余して、ひとりイライラしているのだ。

先駆者は辛いよ。っていうか先駆者がこんなやつだったから、近代文学はあんなつまらなかったのかも。二葉亭四迷は途中で『浮雲』を放り出し、「こんな小説、べつにおもしろかねーよ」みたいな言葉を残して二十年も筆を断ってしまったというのに、その彼が「負け組」に逃げ道として文学を与え、ますますウザい男たちが出現してくるのだから……もー、歴史って不条理！

それってどうなの主義

「それってどうなの主義」宣言

- 一、「それってどうなの」は違和感の表明である。
- 一、「それってどうなの」は頭を冷やす氷嚢である。
- 一、「それってどうなの」は暴走を止めるブレーキである。
- 一、「それってどうなの」は引き返す勇気である。

好評発売中

斎藤美奈子

税込価格 1,575 円

発売：白水社



<http://www.hakusuisha.co.jp/>

「そ連」特設サイト <http://www.hakusuisha.co.jp/soren/top.html>

それって
どうなの
主義
斎藤美奈子

読める! めくれる! 検索できる!
Web上で閲覧できる電子ブック

はらっと

早稲田文学「WB」の
バックナンバーは
はらっとで閲覧・検索!

早稲田文学「はらっと」

検索

TRM 東京レコードマネジメント(株)
http://www.tgn.or.jp/trm/

新商品 シアリース・ホワイト

Beer & Cafe

BERG

ベルク

これから、俺たち、
どうすりゃいいんだ。
そうだ、ベルクへ行こう。
コーヒー¥210 生ビール¥315

JR新宿駅東口改札出てすぐ
(ルミネエストビル)

03-3226-1288

http://www.berg.jp

ベルク通信、全バックナンバーがご覧になれます。

リテラリー・ゴシック [最終回]

高原英理 Takahara Eiri

59年生。主に評論家。美と憧憬の理論『少女領域』『無垢の力』の後、『ゴシックハート』を著してゴスの暗黒卿となる。合言葉は「残酷・耽美・可憐」。



(承前)

盾月の通称リヴィ・アティ(Livi Aty)はLiving Dead Atsushiという最初の呼び名がつづまったもので、そもそもは「生ける屍の敦史」のはずであったのに、略されてみればDeadが抜けて「生きている敦史」という当り前のあるいは真逆の意味となっていた。

とはいえ、鈴木泉三郎作として知られ映画にもなった例の薄気味悪い芝居のように旧仮名で『生きてゐる敦史』と記せば、殺しても殺しても後ろからついて来る、陰気で厭な死人を思わせもする。

そんな盾月の眼を覗き込んでみると、不吉な、世に最悪のことどもが思われたものだ、などと語ればいかにもそれらしいが、嘘だ。どこか抜けた、袖に火がついていても気づかないぼんくら野郎だった。よくグラスを倒した。

あるとき、盾月が眼の大きな、細身の若い女を連れてきた。

「こいつと死のうと思う」

私は笑った。「似合いだな」

「この女、すぐ首切んだ、見るよ」と女の左手を掴んで差し出すと縦横に傷が走っている。

「そっちは本物か」そう言う

「お前なんにも知らねえな。こいつは生きてえからやるんだよ。最初から本当に死ぬつもりなら青木が原で首つてるって」

「知るわけねえだろ。俺は自殺したことないし」

「自殺じゃねえんだってさ、わかってねえな」

「じゃなんだよ」

「ロシアンルーレットやるときみたいなさ、充実感だよ」

盾月はその後を言わなかった。女は三か月後に死んだ。自殺ではなかった。なにやら薬、といっても睡眠薬とか鬱病の薬とかだが、それを大量に飲んだため嘔吐し、吐瀉物が喉に詰まって死んだという。薬はいくら飲んででも自殺できるものではなかったという。

盾月は説明が苦手でユーモアを欠いていた。もともとひどく内気で社交下手、しかし長身で容姿に優れていたから相手を楽しませる風の態度も必要はなかったのか、特にバンドを始めてからはそこに在るだけで人は寄ってきた。そして面白いことに、つきあう女いずれも、数週間で破局となる。

ギターの河合も一時、盾月の愛人だったが、すぐ別れたと聞く。しかしその後も以前と変わらない様子の付き合いが続いていた。河合はそういう女だった。頭はよいのに昨日のこともよく憶えない。だからか、恨みを持続できない。今だけが大事だから、とよく言った。ときおり発作だと言っては口に器具をあてた。喘息が持病だった。ギターは実に下手だった。

小田原も温厚だった。怒っているのを見たことがない。低劣な悩み事を口にしても朝まで聞いてくれた。

「敦史、どう思う?」と尋ねると「子に持ちたくないわあ」と言った。ホラー映画が好きで、時間があると映画館にいた。ゾンビ系の映画にとりわけ詳しかった。

最も小柄な井川は見かけによらず気性が激しく、何度か客とトラブルを起こした。その都度小田原が話を付けた。

本当にテクニックがあったのは井川だけだった。当時ダンダンドタダ単調な繰り返しばかりのポジバンバンドの中、バイロン・ピスはリズムだけはシャープだった。

盾月がバンドに加わる以前から親しかった私はメンバーと時間をともにすることも多かった。アーティストぶった話ばかりしていた。

やってみないか、と言われ、調子に乗っていくつか歌詞を書いた。中からいくらかましに思える断片だけを記す。他はもっとひどい。

血薔薇、青薔薇、わが一族は、幼児焼死の知らせに華やぐばかり。

永劫にゆれる金色の木の葉、森の奥の泉に浮かぶ死体。

見るともない、おまえの、水底色の眼に映す、下がり飾りのような日々。

いつか胸くるしい硝子のかけらを身に秘めた憶えはないか。

そのとき語りあったことが現在の私の考え方と感じ方のいくつかを決めている。最初の頃は皆、自分の偏狭さばかりを競いあって、眼をおおわんばかりに幼稚だった。少しましになったのは「俺たちパンビーじゃないから」と話す客の言葉を聞いてからだだったかと思う。「やっぱり恥を知るべきだ」と、そう、井川が言った。パンビーは「一般ピープル」すなわち一般人の意味、聞かなくなった語だが今も言う者はいるのだろうか。

ちょうどその頃、「ポジバン」は「ゴス」と言い換えられた。ゴシックロマンスの由来に詳しい怪奇好みの小田原がその呼び方を歓迎した。ゴスは生き方であると小田原は言った。

記憶する、私の、そして彼らの、言葉のいくつかを以下に記す。もはや最初に誰が口にしたのか、正確には憶えていない。

人は説得されない。しかし魅惑される。

ゴシックは解決を信じない。ゴシックはただ今を耐えるための心の装いである。

もうじきだ、もうすぐ生き終える。

多くに好まれるのは姿を凌駕した行動の強さだ、しかし形だけに魅せられてしまう心から耽美は始まる。

われわれが個性と考えているものなどごくごく僅かな差である。微差を拡大して愛憎することに生の喜びがある。生を歓迎する人ほど差別意識が強い。

私が私であるという罪。たとえ死んで見せても罪は消えない。

あいつのせいでうまくゆかない、と言っている間は幸せである。

ゴスな好み振る舞いを、趣味、と言われると怒る。

ゴシックは耽美と反抗の間で引き裂かれている。

これだけでも与えられた紙数を遙かに超えた。ひとまず終わりとする。いつか続きを記すこともあるだろう。念のため申し添えておけば前回[08]と今回[09]に記したことはフィクションである。

なお、連載してきた「リテラリー・ゴシック」(内、[01]～[07]の回)は、大幅に増補訂正して朝日新聞社から刊行されることとなりました。刊行時期未定。仮題『ゴシックスピリット』。

次はそちらでお会いしましょう。ごきげんよう。ゆ

現代作家が選ぶ世界の名作 ● 第九回 選・金原ひとみ

IL DISPREZZO

軽蔑／侮蔑（冒頭）

アルベルト・モラヴィア

大久保昭男・訳

第1章

今になってはっきりと言うことができるのだが、結婚して最初の二年間は、妻と私との関係は完全なものだった。私の言う意味は、この二年間は、二人の官能の完全で深い調和にはいつもやわらかいペールのようなもの、あるいは別の言葉で言うならこの沈黙とでもいったものがあったものになっていったことである。それは、あれこれの場合に、一さいの批判めいた思いをしりぞけ、愛する相手を愛だけによって判断するという状態である。私にはエミリアは完全無欠なものとして映っていたし、私もまた彼女の目に同じようなものであったらと思う。あるいはおそらく、私は妻の欠点に気づいており、妻もまた私の欠点を知っていたのかもしれないが、愛にもとづく神秘的な変化によって、それらの欠点は私たち二人にはとるに足らないものと思われていたのに違いない。いやそれどころか、欠点としてではなく、特殊な性質の長所でもあるかのように私たちは互いに見ていたのかもしれない。要するに、私たち夫婦は相手を批判しなかった。私たちは愛し合っていた。この物語の主題は、私が依然として妻を愛し、妻を無批判に受け入れていたときに、どのようにしてエミリアが私の欠点を見出し、あるいは見出したと思ひこみ、私を批判し、遂には私を愛さなくなったか、を語ることである。

人は幸福であればあるほど、その幸福を意識しないものである。奇妙に思われるかもしれないが、この二年間には、私はしばしば自分が倦怠に悩んでいるとさえ思っていたのである。そう、私は自分の幸福に気づいていなかったのだ。妻を愛し、妻からも愛されながら、私は世間の誰と同じ

状態にあるのだと思っていた。私にはその愛は、普通であたり前で、貴重な点など何一つないものと思えていた。それは、毎日呼吸している空気のようなもので、それが不足してみなければ、その値打も素晴らしさもわからないものだったのだ。このころ、私が幸福だと誰かに言われたら、私はおどろいて声をあげたかもしれない。おそらく私は、明日の保証がないのだから、妻を愛し妻からも報いられてはいても、自分は幸福とは言えないと答えたことだろう。なるほどそのとおりだった。私が引き受けていた、ある二流どころの日刊紙の映画批評というつまらない仕事と、同じくジャーナリズム関係の似たような仕事とで、私たちは辛うじてやりくりをしていたのだから。私たちはある安宿の、一間きりの家具つき部屋に住んでいた。余分なものを買う金などほとんどなく、最低必要を充たすにもこと欠くことがときどきあった。これで、どうして幸福であることができたろうか？ いや、このころほど愚痴をこぼしたことはなかったとさえ思う。この当時の自分こそ本当に幸福だったのだとさとするのは、もっと後になってからである。

最初の二年間の結婚生活の後に、私たちのくらしもやっと好転した。私はプロデューサーのバティスタと知り合い、彼に頼まれて、私としてはじめてのシナリオを書いた。この仕事を私は一時凌ぎと考えていたのだが、それは私の職業となる運命だった。しかし、ちょうどこのころ、エミリアと私の関係も望ましくない方向へ変化しはじめていた。私の物語は、シナリオ作家という仕事に私が手をつけ、私たちの夫婦関係の中に最初の冷却が訪れたときからはじまるのだ。この二つの出来事はほとんど時を同じくして起こり、後で見るように互いに直接的な関係をもつものだった。私の記憶が時間の流れをさかのぼるとき、その当時には何の意味もないことに思われながら、後になって私にとって決定的な意味をもつことになる一つの出来事のぼんやりとした思い出が浮んでくる。私は市の中心のある歩道に立っている。エミリア、バティスタ、それに私の三人はレストランで夕食をすませたところで、バティスタが宵の残りを彼の家で過ごそうと提案したので、私たちはそれにした

がうことにした。三人はバティスタの自動車の前にいた。それは赤い高級車だったが、細長くて座席が二つしかなかった。バティスタは運転席に腰をおろすと、扉を開いて言った。

「あいにくだけど、座席が一つしかないんだ……モルテーニ、君は別の車をひろって来てくれないか。……さもないや、ここであとちょっと待ってもらうかだ。なに、すぐに引返してくるが」

エミリアは私のかたわらに立っている。彼女が着ているのは、袖なしの、襟が大きく開いた黒絹の服で、彼女がもっているたった一着の夜会服である。腕には毛皮のオーバーを抱えている。季節は十月で、まだ温かった。私は妻を見た。何故かはしらないが、静かに落着いた彼女のいつもの美しい顔に、何かの不安といつにない一種の当惑とが滲んでいるように私は思った。私は陽気に言った。

「エミリア、バティスタに乘せてもらえよ。僕はタクシーですぐ後からいくから」

エミリアは私を見やると、気詰りな口調でゆっくりと言った。

「バティスタに先にいつていたでいて、あたしたちはタクシーですぐに後からいくようにした方がよくはないかしら？」

バティスタは扉から顔を外に覗かせると、冗談めかせて叫んだ。

「こいつあ参った！ わしをひとりぼっちにしようというのかね！」

「いいえ、ただあの……」とエミリアは口ごもった。突然に私は、妻のいつもの静かで調和のとれた美しい顔が曇り、苦しげと言いたいくらいの困惑に歪むのを見た。しかし、すでに私の口は開いていた。

「バティスタの言うとおりだよ。さあ、彼に乘せてもらえよ。僕はタクシーでいく」

今こうして書いていると、興奮をとまなかったある思いが私の脳裏によみがえってくる。バティスタの隣りに腰を下ろした妻は、扉がまだ開いたままの車の中から、不安と折りりと恨みとを同時にこめたような眼差を私に投げた。私は

それを無視した。そして、人が金庫を開めるときあの決
断たる動作で、自動車の重い扉をボタンと鳴らした。車は
走り去った。私は陽気に笛を鳴らしながら、近くのタク
シー停留所に向かって歩きだした。

プロデューサーの家はレストランから遠くない。当り前
なら私のタクシーは、パティスタの車と同時にではないに
してもその後に着くはずだった。ところが、途中の十字
路で思いがけない事故が起こったのだ。私の乗ったタクシ
ーと一台の乗用車とが側面衝突をひき起こしたのだ。双方
の自動車が破損した。タクシーのフェンダーはこすられて
へこみ、相手の車は扉に傷がついた。二人の運転者は車か
ら降り、にらみ合いの姿勢でどなり合いののしり合った。
弥次馬が集ってきた。一人の巡査が中に入り、やっとのこ
とで二人を引き分け、最後に彼らの名前と住所を聞いた。
この間、私はタクシーの中で別にいらいらすることもなく、
いやほとんどとうとっていいような気分にはひたり
ながら待っていた。というのは、私はたぶん飲み食いし、
しかも夕食の終りごろに、パティスタから彼の映画のシナ
リオを書かないかという申し入れをうけていたからである。
けれども、この事故とそれに続く紛糾とで、たつぷり十五
分が過ぎていた。こうして私は、かなり遅れてプロデュー
サーの家に着いた。サロンに入ると、脇掛け椅子に体を埋
め、脚を組んだエミリアの姿と、部屋の隅の移動ホームバ
ーの前に立っているパティスタとが目に入った。パティス
タは陽気な顔を私に向けた。ところがエミリアは、嘆くよ
うな、ほとんど訴えるような口調で、私の遅れた理由を尋
ねた。ちょっとした事故があったのだと、私はあっさりと
答えた。答えながら私は、自分の口調が何か隠しごとでも
あるかのような、逃げ口上めいていると感じた。しかし実
際は、私はこのときの自分の言葉に何の意味も与えていた
わけではなかったのだ。けれどもエミリアはこたわった。
「事故? どういう事故?」さっきと同じ奇妙な声で彼女
は言った。

引用出典・『軽蔑』（至誠堂新書）
（後略）

「解説」 軽蔑、侮蔑

金原ひとみ

ゴダールの「軽蔑」を観て、いたく感動した。一緒に観てい
た彼は、観ている間ひどく憂鬱そうな顔をしていただけで、
そんな彼に構わず、私は素晴らしい感動だ革命だと喚びたい。
それからというもの、私は一人で何度も繰り返し「軽蔑」
を観た。彼氏が部屋に籠もっては「軽蔑」。彼氏が夜遅くなっ
ては「軽蔑」。彼氏が上司とゴルフに行っている「軽蔑」。そんな事
をしているものだから、入るたび「軽蔑」が流れているリビン
グに彼は少々嫌な顔をしていたし、当てつけなのかも知言われ
たけれど、お構いなしに見続けた。何故自分がそこまで「軽蔑」
に惹かれるのか、分かるような分からないような、といった具
合のある日、「軽蔑」に原作があると人づてに知り、こりゃあう
かつだったぜと大慌てで「軽蔑」の原作、「侮蔑」を手に入れた。
そして、モラヴィアの「侮蔑」! またこの何と、美しい事。
私は読んでいる間まるで肺抜けのように恍惚としていた。感動
して、時には泣き、時には笑い、時には死にたいとすら思った。
そんな、人生のような読書を経験した私は、やはり例の如く彼
氏に薦めた挙げ句、「あなたには分からないかもしれないけど」
と付け加えた。しかし、目の前で彼が流々「侮蔑」を読んでい
る最中、私は少しずつ、自分が何故ここまで「侮蔑」に惹かれ
るのか、その理由が分かっていた。私がモラヴィアに惹かれ
るのは、著者自身が女性を理解したいと望んでいるからだ。私
が「侮蔑」を読んでいる間感じていた恍惚は、女性を理解した
いという男の欲望への恍惚だったのだ。そして、私が彼にモラ
ヴィアを勧めるのは、彼にもその欲望を持ってもらいたいから
だ。そして、彼が「軽蔑」や「侮蔑」を早く思っていないのは、
彼は既に女を理解していると思ひ込んでいるからだ。「侮蔑」の
ページをめくる彼は、私の視線から逃げるように手で顔を覆う。



© Florian Siegmund



アルベルト・モラヴィア © Alberto Moravia
一九〇七—一九九〇。イタリアの小説家。21歳で自費出
版した長篇『無関心な人びと』は、ブルジョア社会の顔
貌を描いて話題を呼んだが、のちにムッソリーニらの
ファシズム政権により、また戦後は教皇庁から、それぞ
れ禁書として抑圧を受けた。主な作品に『アゴ스티ー
ノ』『ローマの女』『コンフォロ・ミスト』など。

金原ひとみ © Kanahara Hitomi

83年東京生。デビュー作『蛇にピアス』ですばる文学賞
と芥川賞を受賞。翻訳家の父を持つ「過」したデビュー
以前や、同作の過激な物語や文体が話題となるが、そう
した表面に隠された、きわめて豊かな詩情と技巧とが、
二作目以降次第に露わになりつつある。著書『アッシュ
ペイジー』『AMERIC』

講談社◆話題の新刊

※定価は税込です。

となりの姉妹

長野まゆみ

定価1,575円
ISBN978-4-06-213542-9

ある日、庭から発見された蛇の石の意味は?
隣の姉妹と放浪癖のある兄、そして、近所の酒屋の奥さ
んの死、家と家につながる人間の縁。此岸と彼岸の間を
結ぶ不思議な物語を描く長野まゆみの最新長編小説。

円朝幻の速記本、ついに解説!

円朝芝居噺夫婦幽霊

辻原登

定価1,785円
ISBN978-4-06-213800-5

安政二年、天下の御金蔵四千両が盗まれた。犯人は
果たして? 円朝、幻の落語を本邦初公開。安政の大
地震当時の江戸を舞台に繰り広げられる人間模様。

完全版
土屋アンナ
写真集

トップモデル、女優、歌手、
現在最も人気のある
土屋アンナの
最新決定版写真集。

ANNA

蜷川実花
撮影

8年にもわたって彼女を
撮り続けた蜷川実花の
壮絶で心奪われる
写真の数々。



定価2,100円 ISBN978-4-06-213750-8

俺の人生に時給くれ!

池田雄一 連載③こんどは皇居を走らせろ!

69年生。文芸批評家。著書に『カントの哲学』。共著として『ネオリベ化する公共圏』。



■ゲブレセラシェ■ それにしても、まさか本当に3万人規模の都市マラソンやるとは思わなかったよね。

■エルゲルージ■ そのために、ボランティアが1万人、警察官が5千人ほど動員されて、都心部の道路が6百本あまりも封鎖されたらしい。3万人の参加者のために、都心部が7時間あまりにわたって交通規制されたんだからな。石原慎太郎個人の選挙向けのパフォーマンスだという批判もけっこうあるけど、じっさいにテレビみると、慎太郎は優勝した「ヤクルト」のダニエル・ジェンガのとなりに例のコワイ笑顔でずっとはりついているし、反対側には息子の石原良純がいてジェンガに小学生みたいにへたくそなインタビューしてるし、これってホントにプロモーションになるんだろうか?

■ゲブレセラシェ■ いや、そんな心配されても。そういえば都心部を走らせろという要求は、数年前から民間レベルで出ていて、たとえばNPOが主催している「東京夢舞いマラソン」っていう、タイトル的にはかなり痛い感じのイベントが2001年から開催されているんだけど、これは「3万人で銀座を走ろう」を合い言葉にしたデモ・マラソンのようなものらしい。いちおうマラソン大会らしいんだけど、走るのは歩道で信号遵守(笑)。こんなじゃふだんの練習といっしょだって。ところがこれが最終的には参加者3千人規模のイベントにまで成長したらしい。千人以上の人間が、歩道を信号守りながら走ってるわけだから、ある意味東京マラソンよりすごいよね。このような地道な努力が実を結んだと解釈すべきか、まんまと石原慎太郎に利用されたかと判断すべきか迷うところだね。「東京夢舞い」じゃなくて「石原慎太郎三選の夢舞いマラソン」ってことだね。

■エルゲルージ■ いや笑えないって。だけど「夢舞い」の方は、考え方としてはサウンドデモにでてきた「路上解放」というスローガンとたいしてかわりなかったわけだ。いざ東京マラソンとして実現されてみると印象がずいぶんちがうな。テレビ中継でフジのアナウンサーが「この東京の道路が使えることに

感謝して」とか言ってたけど、何でお前が言うかって思わない?

■ゲブレセラシェ■ たえば戦争でもいいけど、なにかある状況をつくりあげる者っていうのは、財とか行為、あるいは身柄そのものをいったん人民からすいあげてからまた配りなおすわけだね。柄谷行人に言わせればそれは国家による略取と再分配ということになるよね。わかりやすいのは、これまで石原慎太郎によってできちゃった大道芸人のライセンス制度だね。たしか「ヘブンアーティスト」っていう、恥ずかしい名前がついていたと思うけど。これも路上パフォーマンスという行為をする資格、ていこう行為そのものをいったん取りあげたうえで都が認めたパフォーマーにのみ分配している。こういった場合に気になるのは、取りあげられた行為を取り戻すために主張する、というベクトルと、取りあげた側が、ふたたび与えるというベクトルがぜんぜん逆だということだね。デモなんかと同じく都市マラソンには、自分が立っているこの場所は、いったい何のためにあるのかという危険な問いが隠されているはずなんだけど、東京マラソンにおける「感謝」発言というのは、完全に再分配をとおこして「贈与」のイメージで語られているということだね。

■エルゲルージ■ そう考えていくと、ベーシックインカムなんかも、もともと持っていたものを取り返す権利として語るのが、それとも親方からの配りなおしとして語るのがによってまるで意味合いがちがってくるよな。そして統治者側は取り戻しの物語に対しては抑圧するんだよ。今回の慎太郎のエビちゃんスマイルと、去年のプレカリアートのデモに対する法を超えた弾圧ぶりっていうのは同じことの裏表だよな。それにしても、皇居のまわりをグルグルまわるのがランニングコースの定番だというのは悲しすぎるぜ。だれか皇居のなかでクロスカンツリーやらせろという気骨のあるランナーはいないのかね。

■ゲブレセラシェ■ 北の丸公園はぶつうに走れるんだけどね。△

※登場する人物名は実在の人物とは関係ありません

Msquare's company produce
原作 驚沢萌 「ウェルカム・ホーム！」
4月17日(火)～22日(日) 於: ウッディシアター中目黒
公演詳細 <http://www.woodytheatre.com/msq/index.html> 問合せ 080-5695-2007 (制作)

Welcome Home
ウェルカム・ホーム!

家に帰ってきたときに、こう言ってくれる人が、たぶんあなたのほんとの家族。
—— おかえりなさい。

超ベストセラー「東京タワーオカンとボクと、時々、オトン」を生んだ[文芸]雑誌

en-taxi ODAIBA MOOK No.16 WINTER 2007

エンタクシー 16号

責任編集 柳 美里 福田和也 坪内祐三 リリー・フランキー
A4変型判 定価880円(税別) 次号17号は3/30発売
表紙画＝リリー・フランキー

大好評発売中

「よしだはなんだか旨そうだ」
吉田健と金沢「銀座・蕎麦よし田」富士吉田うどん 他

美味恋慕大特集
福原義春 平松洋子 吉田明 福田和也 他

五木寛之「リリー・フランキー」
「歌への覚悟について」

「レポート」大竹伸朗
全景展「パニック」
磯崎新 湯浅学 中原昌也

「文芸の器」
谷崎潤一郎「鍵」風癪老人日記」
をめぐる企まれた虚実の摩擦
ゲスト 小林信彦 宮本徳蔵

「文芸評論」
村上春樹の新訳「グレートギャツビー」
小島信夫の死 大江健三郎 坪内祐三

「処女小説」
「ドシラソファミレス」BIRKKE

「小説」
「御会式」石丸元章

「連作長編(第二回)」
「ホーさんのアザラシ生田紗代」

「好評連載」「談春のセイシ」信増ベジ!

「誰も知らない小さんと談志」
小さん 米朝 二人の人間国宝立川談春

「書評」ギョウター「グラス回想録」
タマギを剥きながらをめぐって 山本尤 浅田彰

吉川潮 木村万里 呉智英 末井昭 赤井三尋 宮崎孝子 一志治夫 他

扶桑社 〒105-8070 東京都港区海岸1-15-1 <http://www.fusosha.co.jp> ◎お問合せ先 販売業務部 ☎03-5403-8859 (月～金10:00～17:00) 全国の書店でお求めください。

動物¹徘徊す

山本動物

Yamamoto Doubutsu

1973年東京都生まれ。85年頃ふとものごろがつく。
以来ずっと動物。それ以前のことはよくわかりません。

我輩は動物である。名前はまだない。というか、種類も住所も仕事もなんにもわからない。ただただきもちよく安穏と日々を過ごしている。昨日何を食べたかさえもわからないほどのきもちよさなのだが、どこから来たのかだけはなんとなく記憶にある。ような気がする。我輩はおそらくマルクスの『資本論』のなかからやってきた。んじゃないかなあ。そう、メタ商品としての貨幣というやつだ。精神分析的に言えば、対象^{オブジェクト}aともいうのかもしらん。なんであれ、個物でありながら全体でもあり、系全体をまわしていく唯一にして無二の至高のフェティッシュなのだから、我輩のえらさもおのずから知れようというものだ。といま我輩も知って驚いている。はやく慣れようと思う。

いっぽうで昨今あちこちで「動物」という言葉を目にする。「オタク」や「ファスト風土」や「アメリカ人」などなどと絡めて動物が僭称されることが多いようだ。先にも述べたように、動物は唯一にして無二のえらいものであるから（順応性の高さは我輩のあまたある長所のひとつである）、おそらく他の動物たちは光輝ある真の動物というものを知らないのではないだろうか。であるがゆえに、無邪気に動物を名乗り、我輩だけに許されてあるはずののんびりとした生活を満喫などしくさっていることと思われる。いや、待て、それであるばかりかあまつさえ僭王らの誰もが自分だけは唯一にして高貴な真の動物だと思っているとしたら……諸君、これは大変に遺憾な事態だ！我輩は高貴なるもののみが持つことが可能な純粋な怒りにしばらく震えた。こころあるものには我輩の体毛がいとも優雅にたなびくのが見えたという。この状態はしかるべく是正されねばならん。よって余は（かなりえらさに慣れてきたので人称はやはりこれでいきたい）世間に討ってでようと思う。どちらが真の動物（偽の動物）であるのかはっきり白黒つけねばならん。というわけで、以下しばらく我輩と他の動物たちとの熾烈なバトルが繰り広げられることになると思うが、そのような発想自体が春の雲のようにふわふわと長閑に生きてきた（坂の上の雲自身はけっしてそれを追うことはない）動物のものではない気がする（豹変するのも我輩の長所のひとつだ）。なので、結局どっちが真の動物だろうとかまわらないという腰くだけな結論もはや見えている気もするが、読者諸兄にはどうかご寛恕ねがいたい。

さて、世間へとまろびでた我輩がでくわしたのは綿矢りさ『夢を与える』である。動物は美形と大きな数字が好きだ。主人公の父母の来歴にはじまり、必ずしも望まれて生まれたとはいいいにくい主人公（しかし決定的な負性というわけでもない、微妙で巧妙な描き方になっている）がTVや雑誌といったメディアの世界と学校や交遊といったリアルの世界がめまぐるしく交錯していく中で成長していく、ごく短かな（ゆえにどちらかと言えばアンチとなるが）ビルドゥングスロマンである。

簡にして要を得た構成・描写と書き割りの事実を加速度的に畳み込んでいく乾いた迫力で描いた傑作というほかない。動物にしか許されないドライさ、空虚さ、そして何よりも速度があり、これは真の動物なのではあるまいかと、最初にしていきなり我輩の心胆は恐怖と歓喜に震え上がった。

しかし、最後まで読み終えたとき、それが杞憂であったことがわかり、おおいに安堵し、また一抹の寂しさを禁じ得なかった。本人の意図がどうであれ、どうもその結末がバセティックに見えてしまうのだ。メディアの中の空間とリアル空間、しかしその敷居はいまや極薄であり、回転扉のようにその表裏はくるくると回り続けることで、世界（＝セカイ）はほぼメディア＝リアルといてよい、のべつとした一元的な環境に覆われている。その距離を喪失した世界の中で、特権的な誰か（同時にアトランダムな誰か）が世界を回す回転扉に触れてしまい、極薄の層の内に距離を創り出す（夢を与える……）。そのとき「誰か」はいっさいの世界から放逐され、同じことだが世界そのものとなってしまふ。そのことはもちろん悲劇的なことだが、同時に喜劇的なことでもある。世界から「わたし」は放逐されるわけだが、同時に「わたし」は「わたし」をも含む世界にもなるわけだから。最後の完全に空虚になった場所で発せられる呪言めいた妖しい言葉。それは「わたし」が極限まで擦りきれた状態でどこからか響く悲鳴でありながら、同時にそれを内面とすることで辛うじて人間として「わたし」を世界に繋ぎとめる。少なくとも、そのように読めてしまうのはやはり動物としてはいまだしと言わざるをえない。

残念ながら、動物の旅は終わらなかった。はやくだらだるときもちのよい生活に戻りたい……（くじけやすいのは我輩のおそらく唯一の短所である）。^ぶ



若手作家 五人による 小説同人誌

（メタセコイア）

「METASEQUOIA」発刊!

▼オンナコドモの座りシヨンベンの臭気
たちこめる現代日本文学のホコリに、五人の
ロクデナシ野郎どもが黒い腕を突っこみフィ
スト・ファックする、スピードアシッドエク
スタシーな作品集!▼清野栄一『レイヴ・
トラヴェラー』（太田出版）『オール・トゥモ
ロース・パーティーズ』（双葉社）他／モブ・
ノリオ『介護入門』（文藝春秋）第131回芥川賞
受賞作／釣崎清隆『死体と眼が眩んで』（リ
トルモア）／アイカワタケシ『虫けら艦隊』
（河出書房新社）／曾根賢『フラケン』（パ
ストデイズ）（河出書房新社）▼四月下旬発
売予定／限定200部／定価1XXX円▼三
月下旬に「METASEQUOIA」のホームページ
（www.metasequoia.jp）が立ちあがりま
す。購入方法は詳細はwww.metasequoia.jp（「WEB」のホー
ムページ）からジャンプください。

比較心理学、動物行動学の基礎文献

パピーニの比較心理学

M. R. パピーニ 著 比較心理学会 訳



「進化」を前面に押し出すことによって、
心と行動の起源と発達を考えるうえでの
基本的な視座を提供する。

B5判・558頁
定価7140円（本体6800円＋税5%）

心の輪郭

比較認知科学から見た
知性の進化

川合 伸幸
KAWAI Nobuyuki



私たちの心は、
どこまでがヒトに独自なもので、
どこからがほかの動物と同じなのだろう。

四六判・200頁
定価1680円（本体1600円＋税5%）

北大路書房

〒603-8303 京都市北区紫野十二坊町12-8
☎ 075-431-0361 振替 01050-4-2083
FAX 075-431-9393
<http://www.kitaohji.com>

ものがたりの たいそう 大塚英志

第三回●おはなしの神様降臨

子供と一緒

さて、前回は子供たちに「好きなどうぶつやのりもの」などの絵をたくさん描いてね、と言ったところ、電車少年が一人混ざっていて東武東上線や総武線と、十数種類の電車がその車両までしっかり描き分けられた絵をひたすら描いてくれた、というところまでです。こちらとしては「電車」とか「バス」とか「飛行機」とか適当に色々出てくると思いついていたのですが「のりもの」の中で「電車が好き」ならこの結果は当然です。そしてこういう想定外の事態が起きるとは「ああ、おはなしの神様が降りてきてくれた」と思います。

さて、二時間で絵本をつくる方法の説明を簡単にします。子供たちの描いた絵、プラス七字さんの「男の子」や「女の子」、あるいは「塔」や「森」といった、なんとなく物語のイメージがわきそうな絵を混入させ、数十枚の絵が揃ったところで、絵を裏返しにしてシャッフルします。そして、何も考えずに順番に八枚の絵を裏返しそのままとっていったでそれぞれ番号をふっておきます。これで絵本はほぼ、出来上がりです。絵を引いた順番にはこういう意味があります。

ーの絵は主人公です。ここに人が来ようが人以外が来ようが、それが主人公という決まりです。つまり、「電車」の絵が大量に混入している以上、かなりの確率で主人公が「電車」、しかも、鶴見線とか車両が具体的な電車になることが予想されます。「機関車トーマス」状態というところでは「昔」でも「前世」でも「前」がこうだった、ということ。3、4、5は一つのセットで1は3に頼まれて4を5のところに届ける、という「おはなし」にしないでいけません。「赤頭巾」は「おかあさん」に頼まれて「パン」を届ける、というのと同じパターンですが、何しろ、どんなカードが出てくるかわかりません。6はとりあえず7が発するなり行動を起こした直後に起きることです。主人公が6になってしまったら6と出会って何か起きる。しかしそれはーのおつかいを邪魔しようとする7の仕事です。けれど都合良く8が助けてくれて、無事、おつかいは成功。すると最後にどうなるかは自分で考えてね、というものです。

白紙をホチキスで閉じた「白い絵本」の見開きの左ページにーから8

をまず、順番に貼り込んでしまつて、その上で、親子で、もしくは子供をまじえた大人たちのグループで、以上のルールで「お話」をつくります。もうおわかりだと思えますが、これは『物語の体操』などでよく使う「行為者モデル」をベースに絵を並べて「お話」の構造を決めました。さて、つじつまをあわせていく、というものです。

例えばあるグループではーは女の子が出たものの、2は寝台特急北斗星です。早くも「電車」出現です。さて女の子が「前」はこの「電車」だった、という「神様のお告げ」をどうつじつまをあわせるか。

こんな「答え」を用意したグループがいました。「私は人形の女の子です」「私の体は寝台特急『北斗星』のシートの布でできています」(図一)うまいですね。電車のシートで作らせた人形が主人公。そうそう考えて思いつく主人公ではありません。

あるいはJR鶴見線が主人公になってしまったグループでは池袋線20000系のところに仲間のタイコを届けると船が現れ、それは丸の内線の仕業で、それを池袋線普通車が助けてくれる、とカードの神様に言い渡されました。

それがどんな「結末」になったかは図2の通りです。新しい車両20000系ができて「電車音楽会」を開くのでタイコは池袋線のところに行きたい、けれど、池袋の手前には船が浮かんでいて巨大な池ができてくる。丸の内線は一種類しか車両がないので新型車両ができた池袋線をうらやましかった。しかしそこになんと空飛ぶ池袋線の普通車の方が現れて……。

と、こんな感じです。電車だらけですが、ちゃんと「おはなし」は成り立ちます。

こうやってできあがったお話を右ページにクレヨンで書き込んで、「絵本」の完成です。子供に絵を描いてもらうところから完成まで、指導する人がコツを飲み込んでいるとだいたい二時間で、つくれます。

ぼくが今、考えているのはこんな形で「おはなし」を親子でつくるプロセスを指導してくれるインストラクターのような人たちをつくれなにか、ということ。その話は次回。

(つづく)



大塚英志 © Otsuka Eiji

58年生。まんが原作者『捨て子たちの民俗学』『怪談前後』『公民の民俗学』『伝説とは何か』改訂版、『偽史としての民俗学』と民俗学4部作が春までに刊行。

太田出版

新現実

戦時下の批評誌 VOL.4

編集委員

大塚英志／上野俊哉／中塚圭骸

失われた世代のまんが批評

武田敦 紙屋高雪 泉政文 谷口玲 ササキバラ・ゴウ／みなもと太郎

世界の中の戦時下の「おたく」 非武装中立論

トム・ラマールトム・ルーザー 清水知子 今村太平 吾妻ひでお新作24頁



CWS 創作学校

CWS創作学校は、1992年に開校した日本初の本格的ライティングスクールです

通信添削部 ☐ ☐ ☐
1年間・入校随時

通学部 ☐ ☐ ☐ ☐
5月開講 07年度受講生募集中!!

CWSワークショップ

ネットスクール部 ☐ ☐ ☐ ☐
1STEP=添削3回・入校随時

- 創作ベーシックコース
- 創作エクストラコース
- 創作入門コース
- 創作ベーシックコース
- 評論誌をつくる!実践コース **新設!**
1年間・全10講義+雑誌制作+サマーセミナー
- 小説技術コース
1年間・全5講義+添削10回+サマーセミナー

■ お問い合わせ・資料請求>>> CWS創作学校事務局 東京都千代田区三番町30-8 第二生光ビル301 株式会社アイ・メット内 〒102-0075 <http://www.cwsnet.co.jp>
TEL:03-3262-0561 FAX:03-3262-0584 e-mail:info@cwsnet.co.jp

サマーセミナー 2007
2時間で絵本をつくる
物語の体操・子供といっしょ編

1日講座

子供たちといっしょに2時間で絵本をつくります。絵がかけなくても、おはなしをつくるのが苦手でも大丈夫。「物語論」の応用で、理屈抜きで誰でもがストーリーテラーになれる講座です。

講師：大塚英志
日時：8月19日(日) 13:30~16:00
会場：こどもの城 (お子さんと一緒に参加できます)
定員：60名
受講料：3800円 ※日程等変更になる場合があります
e-mail、電話、ファクシミリなどお申し込みください。受講案内をお送りします

新刊
別冊早稲田文學②

〔収録作品〕

永井荷風「監獄署の裏」／内田魯庵「今年の文藝界に在つて最も印象の深かつた事」泥人形「黴」其他
／谷崎精二「谷崎潤一郎氏に呈する書」／松井すま子「店の人」／牧野信「浪漫的月評」／川崎長太郎
「餘熱」／坂口安吾「牧野さんの祭典によせて」／井伏鱒二「青木南八―自叙傳(三)―」／尾崎雄「玄關風
呂」／浅見淵「中野重治について」／後藤明生「笑い地獄」／日野啓三「悠々たる文体の成功書評」李恢成
『われら青春の途上にて』／村上春樹「ペン屋襲撃」／『蒲團』合評「小栗風葉・正宗白鳥・徳田秋江」片上
天弦・水野葉舟・松原至文・中村星湖・相馬御風・星月夜」ほか

既刊
別冊早稲田文學①

〔収録作品〕

坪内逍遙「没理想の語義を弁ず」時文評論／島村抱月「『破戒』を評す」／国木田独步「あの時分」／田
山花袋「兵卒」／島崎藤村「壁」／正宗白鳥「贗物」／有島武郎「批評といふもの」／近松秋江「冷熱」／
幸田露伴「明治に於ける西鶴」／宇野浩二「彼と群衆と」／丹羽文雄「甲羅類」／井伏鱒二「葉煙草」／
伊藤整「待期してゐる文学」文学はどう変わるか?／河上徹太郎「偶感―批評・マスコミ・文芸誌」／色川
武大「ひとり博打」／八木義徳「小説におけるいい文章―中山義秀の場合」／田中小実昌「ノース・ピア」ほか

続刊
別冊早稲田文學③ 二〇〇八年春刊行予定

別冊早稲田文學第二期全三巻

各巻定価四〇〇〇円(税別) A5版並製函入限定千部刊行

発行●早稲田文学会／発売●作品社 お求めは全国書店または直接販売にて

公民の民俗学

大塚英志

※1680円

日本民俗学の発生から初期の展開をつぶさに検証し、「伝統」なるものの恣意性を鋭く穿つ。「愛国心」「教育問題」をめぐる議論の根幹に「石」を投じる驚世の書! 『伝統とは何か』改訂新版

話題の新作

『神聖喜劇』の作家、

『わが文学と世界観』を初めて語りつくす!

未完結の問い

大西巨人

聞き手・鎌田哲哉

※2730円

文学的伝承、愛する作家・芸術家たち、中野重治・花田清輝ら同時代文学者をめぐる鋭利な考察と回想、この国の変わらぬ課題と展望を、縦横に論じる。八八歳の現役作家が贈る「最高の文学入門」の書!

『地の果ての、さらなる果てのトボスへの旅の意志』

『地の果てを、今ここに接続する癡猛で繊細な想像力』

現代小説の方法

中上健次

高澤秀次(編解読)

いま、小説はいかに可能か。壮大な物語世界を背景に、現代文学の異形の巨人が語る小説作法。知られざるバリ講演3島由紀夫をめぐってを含む、中上絶頂期の単行本未収録発言※2100円

悲楽観屋サイードの失踪にまつわる奇妙な出来事

エミール・ハビビー

山本薫訳

祖国にあって祖国を喪失し、敵国の市民として生きる……。総人口の二割に及ぶイスラエル在住パレスチナ人たちの不条理な現実。サイード(金髪巨男)という名のパレスチナ人男性を主人公にイスラエル建国から七〇年代の中東戦争頃までのパレスチナの現実をシニカルに描く、Eサイード絶賛のパレスチナ文学の最高傑作。*2600円

作品社 東京都千代田区飯田橋2-7-4/ 価税込
TEL03(3262)9753 FAX03(3262)9757

たのしい革命 ⑨

桂秀実 Suga Hidemi

柳澤伯夫厚生労働大臣が1月27日の松江の講演会で「女は産む機械」と発言したことが、ジャーナリズムで大きく取り上げられることで、PC（ポリティカル・コレクトネス）と俗流フェミニズムによる非難の大合唱が起こった。これは、政府の少子化対策にかかわる発言であり、それ自体はいかようにも批判できる。しかし、柳澤発言への批判は、概して納得できないものが多かった。たとえば、ジャーナリズムでは好意的に報道されてTVドラマにまでなった向井亜紀（高田延彦の妻）の「代理母」問題にしても、それは、自分たちは「人間」だが、代理母は「産む機械」と見なしていることではないのか。柳澤の「女は産む機械」はダメで向井＝高田は良いというのでは理屈に合わないだろう。

人間は機械ではないという相も変らぬ反発についてだが、ラ・メトリーやノーバート・ウィナーを想起するまでもなく、人間機械論は、それ自体としては単純にしりぞけることができないものである。SFや生命倫理問題を参照するまでもなく、われわれは、ほとんど人間機械論的な環境にいないではないか。難しく考える必要はない。向井亜紀にホロリとしてしまうジャーナリズムも、そのためには人間機械論を杜撰に密輸入せざるをえないということだ。また、80年代フェミニズムの一部には、「女は産む性」といった発想が有力に存在した。エコロジカル・フェミニズムと言われる潮流がそう主張していたし、ジュリア・クリステヴァの理論も「産む性」的な発想が潜在している。「女は産む機械」と言ったからとて、無下に却下できるものでもあるまい。丁寧な議論が必要なのはではないか。

その後の柳澤伯夫の弁明に、人間機械論もエコ・フェミも念頭になかったことは明らかである。しかし仄聞するところ、彼は赤貧の高校時代にマルクス主義者であったという。彼の近傍には、安保ブント創設者の一人であり、後に留学先のアメリカで火災に遭って死亡した生田浩二（経済学者）もいた。

柳澤が今なおその線を押さえていれば、サイバネティクスもフェミニズムもポスト構造主義もSFも踏まえて、「女は産む機械」であると確信を持って言えたかもしれない。柳澤発言は単なる放言でしかなかったが、彼が、その高校生時代のような知的探究心を維持していて確信的に「女は産む機械」と言ったとすれば、事態はまったく別の方向に進んでいただろう。そのことが惜しまれる。

今回の出来事で危惧すべきなのは、日本の政治家のPC感覚の欠落ではない。そんなものは、時がたてば浸透していくだろう。問題は、支離滅裂なPCが何の抵抗もなく流通してしまう、ポストポリティカルな環境なのである。

すでに報道がなされているが、外山恒一（90年代高校生反管理闘争活動家、革命家、元福岡刑務所囚人、ファシスト、前衛政治家、ストリートミュージシャン etc）が、「政府転覆」をスローガンに、今度の東京都知事選に立候補を表明している。彼はPCがもたらしたポストポリティカルな状況に対して一貫して批判してきた人間であり、今回の立候補もその文脈にある（彼の下獄も多くは、その問題にかかわっていた）。その一点だけで、外山の立候補を支持する。都知事選には、かつて内田裕也や秋山祐徳太子（前衛芸術家）という、それなりに意義のあるホームマツ候補がいた。外山は彼ら以上の超ホームマツだが、超ホームマツ以外には現在のポストポリティカルな状況に「政治」を導入しようという者など、いはしないだろうからである。㊟



桂秀実 ◎ Suga Hidemi

49年生。批評家として革命の思考と運動に精魂を傾けつつも「そんなもの来ませんよ」と笑い飛ばしする実践アナーキスト。主演のドキュメンタリー映画『LEFT ALONE』（井土紀州監督）が、ロングラン巡回上映中。

プアプア批評 ③

生田武志



生田武志 ◎ Ikuta Takeshi

64年生。日雇労働。著書『野宿者襲撃論』。連載タイトルは鈴木志郎康の「プアプア詩」に倣いました。ただし、ぼくのは「poor」のことです。

「東のアカバ、西のボンバン」とも言われる日本橋でんでんタウン（大阪市浪速区）は日本第二の電気店街だ。森川嘉一郎の『趣都の誕生 萌える都市 アキハバラ』（幻冬舎）はオタクの個室が都市空間へと拡張した街として秋葉原の専容を描き出したが、日本橋も最近その傾向が強まった。同人誌やまんが専門店、ガンダム系の専門店、フィギュア専門店などが続々と誕生し、ここ1～2年はメイド喫茶がポコポコ開店している。

ところで、その日本橋が貧困問題を抱える街であることはあまり知られていない。地元の学校の校長先生と何度か話をしたが、生徒たちの家庭の貧困問題はかなり深刻で、生活保護受給の比率は高く、家庭環境に様々な問題を抱える生徒がかなりいる。また、日本橋近辺にはダンボール等の回収業者（よせ屋）が幾つかあり、リヤカーでダンボールを集める野宿者がこの地域に集中する。それもあって、夜になるとでんでんタウンでダンボールハウスを作って寝る野宿者の姿が毎日多数見られる。

そもそも、日本橋は江戸時代から明治まで日本有数のスラム街（通称「名護町」）だった。1886年の行政文書ではその光景が「住民は裸体で生活することにも意を介さず、その妻子はボロをまとって紙屑拾いや乞食をなし」などと語られている（現在の日本橋の紙屑回収業はこの「紙屑拾い」の名残りだろうか）。

名護町は1885年～91年、大阪初の「スラムクリアランス」によって解体させられた。それは、「数多くの貧民を立ち退かせた上で不潔家を改造し、改築・新築した家屋には貧民を戻させないという、きわめて効果的な」街の美化事業だった。移転させられた「不潔長屋」の数は、新聞報道によると4930戸（！）。つまり、それ以上の数の住人が立ち退かされたのだ。人々は周辺の村に移り、「六畳一間位の家に夫婦三組も居住」あるいは「狭き小家に4～50名の老若男女が大抵は裸体の儘にてごろごろ寝ころぶ」（！）とい

う有様だったという。おまけに、その先々で警察が再び「退去」を命じてきた。

驚くのは、こうした情け容赦のない排除に対して新聞がむしろ賛成していたことだ。大阪朝日新聞によれば「大坂の犯罪人を云ば先づ名護町の住民を指し大坂の流行病を云ば先づ名護町の住民を指し大坂の貧民を云ば先づ名護町の住民を指し苟しくも大坂に在りて有害なものは悉く名護町より発生せざるはなきが如く実に名護町は大坂の疾病と謂ふべきなり」（以上引用は加藤政洋『大阪のスラムと盛り場』[創元社]より）。

言うまでもなく、こんなことは人権を無視した暴挙として今では絶対に許されないと思うだろう。しかし、そうだろうか。昨年1月と今年2月、大阪市は靱公園・大阪城公園そして長居公園で野宿者のテントを強制排除（行政代執行）した。貧困の結果として住む家を失った人々を、居住していた公園から情け容赦なく強制排除したのだ。120年前に日本橋の住民が「この上は手をもって引きずり出さるるとも立ち退くまじ」と反発したように、去年も今年も野宿当事者と支援者が非暴力抵抗で座り込んだが、大阪市によって「引きずり出さ」れて排除された。去年、大阪城公園から追い出され長居公園に移った人もいたが、120年前と同じように再び「退去」を命じられた。排除の理由は、120年前と同じく「街の美化」であるようだ。新聞も「行政もホームレスも歩み寄りを」（すなわち「追い出される方も悪い」）『野宿が気楽』施設敬遠（いずれも朝日新聞）と報道した。

この排除も、やがては「こんなことは今では絶対に許されない」と感じられるのだろうか。それとも、われわれの社会は同じ事を（柄谷行人がよく言うように）120年周期で反復し続けていくのだろうか。㊟



『大阪のスラムと盛り場』[創元社]

宇都宮で文学



宇都宮アート&スポーツ専門学校は、WBの発刊を支援しています。

小説家・シナリオライター養成コース！

<http://ubdc.ac.jp>



宇都宮アート & スポーツ 専門学校

◎声優・アナウンス科

声優タレント養成コース／俳優養成コース／アクション俳優養成コース／アナウンサー・DJ養成コース

◎スポーツビジネス科

スポーツビジネスコース／スポーツインストラクター養成コース／スポーツトレーナー養成コース

◎マンガ・アニメ科

マンガ家・コミック養成コース／アニメーションコース

◎芸術・デザイン科

イラストレーター養成コース

◎文芸創作科

小説家・シナリオライター養成コース

宇都宮ビジネス電子専門学校

◎電子情報処理科

電子情報処理コース／プログラマ養成コース／SE（システム・エンジニア）養成コース／政治家秘書養成コース／ゲームクリエイター養成コース／ゲームクリエイターSコース／CGデザイナー養成コース／Webデザイナー養成コース

◎経営情報科

大学Wスクール（SE養成）コース／大学Wスクール（IT経営）コース

◎医療秘書科

医療事務養成コース／医療秘書養成コース／病棟クラーク養成コース／医薬（ドラッグ）ビジネスコース

◎幼児保育ビジネス科

保育・幼児・チャイルドマインダー養成コース

◎情報経理科

税理士会計コース／経理事務コース

◎公務員ビジネス科

公務員（三種・初級）コース／警察・消防・自衛官コース／郵政・鉄道コース／政治家秘書養成コース

◎セクレタリー（秘書）情報科

オフィス事務職養成コース／一般事務職養成コース／パソコンライセンスコース

◎経営ビジネス科

販売職養成コース／経営ビジネスコース／ブライダルコーディネーターコース／ホテルビジネスコース

UBDC 総合

〒320-8533 栃木県宇都宮市大寛1-1-1ユニオン通り（宇都宮の原宿）西口側

TEL 028-635-3211（代）

FAX 028-635-3210

E-MAIL <アート & スポーツ> art@ubdc.ac.jp

<宇都宮ビジネス電子> bijiden@ubdc.ac.jp

【重松】巧いなあ、その比喩（笑）。
 【中野】あれに、懐太郎が他人の小説の筋を喋るときと同じ誠実を感じる（笑）。
 今回のあれ、村上龍と石原慎太郎と締矢りさの「文藝春秋」の対談もね。傑作だったよ。村上龍が、「三人とも、ルックスが悪い方じゃない」って（笑）。
 懐太郎と石原慎太郎さんにツッコミ来て（笑）。
 懐太郎と石原慎太郎さんにツッコミ来て、文藝春秋の対談もね。傑作だったよ。村上龍が、「三人とも、ルックスが悪い方じゃない」って（笑）。

だったよ。村上龍が、三人とも、カルタで石原慎太郎さんにツッコまれて（笑）。

【真珠】「自分で言うかね」とか石原慎太郎さんにはツッコまれて（笑）。中井良也に「どこかいいてんすか」って言われたけど、「完全な遊戯」なんてねイイよね。才能だけに書いて。「月刊 石原慎太郎」（サン出版）で慎太郎が福田和也と対談したとき福田が「完全なる遊戯」ってタイトルましかえるのに、本人もそのまま訂正しないの（笑）。もはや自分の小説のタイトルもわかんなくなってるのかな（笑）。

【中井】「完全なる遊戯」のポリティカル・コレクトネスの感覚で言って、「完全なる遊戯」は、政治的なものではない。それは、中井のひともち

福田が「完全なる遊戯」って、あれは、もうわかんなくなってるのかな(笑)。もはや自分の小説のタリルもわかんなくなってるのかな(笑)。でも、今日(二んに)のポリティカル・コレクシヴスの感覚で言って、「完全な遊戯」と、大江の「政治少年死」はすごいですよ。あれは、右翼のひともちよっと考えてもらいたいね。大江は完全に右翼に感応して、アイロニーじゃないんだよ。福田和也なんかより、よほど本物の「バンク右翼」だと思うな! こないだの「さようなら、私の本よ!」にしても、最後までなるかっていったら、六本木ビルスと思き場所です口を起こして、古義人がNHK行って声明を発表しようとする話だよ。よく思いつくと思わない?

それだけでなく、「もし三島があたのとき死ななかつたら」という仮定も三島
たぶん懲役10年ぐらいかな、80年ごろに55歳の、半白髪までだ壮健な三島
が出てきて、おらそう90年代のオウムにつながっただろう、と書いている。俺、
大江さんはホントにそう考えたんだって思うよ。彼にとって三島由紀夫はまさに生
涯の抑圧で、「死ななかつたらどうなったか」を身体的恐怖としてマジで捉えてる。
そのことに感心した。……経きですよ、文学。

そのことに感心した。

【収録】中森さん、やっぱり読んでるし、好きですよ、文学。

【中森】でもね、まだ江藤（淳）さんが生きてたころ、町田康の野間文芸新人賞の授賞式で、壇上で大江と江藤が並んで坐ってたんですよ。それで、町田のギャグに二人一緒に笑ってた。あれはいい光景だったね。そこに見沢知康が現れてね。あいつ文壇の「林家ペー」だったから、「さっき大江と江藤が居たよ」と言ったら、「しまった、もう一生ツーショット撮れない！」ってすげえ悔しい顔してたの。そんな風に、見沢が三島賞候補になったとき、鈴木邦男が「SPA!」でヘンな風に

な気のいい見沢が三島賞候補になつてゐる。『賞の選考に影響がある』とかつてゐる。書いたって感激したんだよね。「賞の選考に認められ、たとえば『調律の帝国』は、死んだから言うんじゃないし彼の努力は認めるけど、たとえば『新潮』の名編集長・坂大江がノーベル賞獲たあとでさえ書き直させたという『新潮』の文筆家・本さんが何十回と書き直させてあのとんでもない文章でしよ。見沢がかわいそうだよ。ホント、ちやうとか、そういうのの気持ちにはわかるけど、文学はひどいと思つたね。文学っていつ「異性」がひとを狂わせるというか、よりによって向いてないひとこそか好きになつたりするでしよ。

か好きになったりするでしょ。

【直枝】「好きになる」のと「やってしまう」のは同じなのかな……。

【中野】よく冗談で「ほくは文学なんて愛してない、文学に愛されてるんだから」とか吹聴してるんだけど(笑)、愛されてないひとに対して文学は酷薄ですよ。映か映画してるんだけど(笑)、愛されてないひとに対して文学は酷薄ですよ。みんな映画が好きで画もそうしょ？(北野) たけしさんと会ったとき喋ったけど、みんな映画が好きでひれ伏しちゃうから、映画にひどい目に遭ってるわけですよ。文学もそうじゃないですか。誰とは言わないけど、文学に片思いなひとの満を持して書いた小説のなんす無様なことか。

と無惨なことか。

●

【中略】逆のを感じたのは「yom yom」と、それについて「渡」で松田（哲夫）さんが書いた文章。あれでなにか感じないひとはおかしいよ。アイドルの世界だと、新垣結衣っていう娘がポッキーのCMで踊ってるのがすくて、ただ踊ってるだけなの。ポッキーという、山口百恵と三浦友和、あるいは松田聖子と田原俊彦のストーリーや歌があるのが定番だったのに、演技もなければ本人の声ない。こまってきたか、とね。

できたか、とね。

【置橋】 物語がないんですよ、ぜんぜん。 オートイオからあれこれぜんぶ引

【中橋】 それって松田さんの「yom yom」論で、ぜんぶ引き算した結果なんだよ。

いたらウォークマンや iPod になったのと同じで、ぜんぶ引き算したのが「yom yom」

文学それ自体から文学的な「物語」や「神話」を引き算したのが「yom yom」

なんだって。小説誌も個人的には好きなんだけど、考えてみれば、江國香織

以降の「売れる女性作家」がいても、みんな単行本で買うんだよね。「オール讀

物」や「小説現代」では買わない。純文芸誌だったぶん、同じことだよな。

……ってことにしちゃう。

物」や「小説現代」では買われ、なにも売れなかった。でも、引き算した「yom yom」なら買う、ってことになっちゃった。
 [漫画] しかし、それでよかったんじゃないですか？ 大衆小説誌で作家がグラビアで
 ラーメン食わなくても、作品が載ってればいい。作家が旅行して、写真一緒に撮
 ったからといってさ、それを羨ましいとも思わないし、すごいとも思わないでしょ
 う？ その面では、「作品があってナンボ」とってどこまで、やっと落ちてきたんじや
 ないですか、正當なものに。

う？ その面では、作品が……
ないですか、正当なもの、
[中絶] それで思い出したのが、「防書月刊」で連載してる nanakikae っていう広島
の女子高生。岡本かの子の「呼ばれ乙女」を模倣試験で読んで感動して、図
書館で取り寄せて、それを全文印字して、自分で製本して本、つくっちゃったんで
書。「若いやつは本読まない」っていうけど、つくっちゃうんだから。最新の号ではね、
谷崎の「刺青」に自分なりのカバーを付けてみました。って。カバーにトレージ
ン、刺書が入るようにしてさ……。

谷崎の「刺青」に自分なりの解釈を……。

クベーパー使って、刺青が入ったようにしてさ……。

【重松】ほんとに「本」が好きなんですわね。

【中野】「妄想一箱古本市」って回なんかは、竹久夢二の「秘密」、芥川龍之介「舞踏会」「蜜柑」の豆本をつくったり、中島敦の「弟子」なんて一巻ずつ巻物にして箱に入れてたり、16巻セットをつくってるの。こういうのは逆にパソコンがある時代ならではのしよ。

……ありがとうございますね、テキストって。

【重松】 どう加工するか楽しみですよね、ナキスに。

【中野】たとえば「重松清 vs 獅子文六」みたいなことが日常的に起こるようになる(笑)。
【重松】安売りにしてるCDは、アルファベットの順だから、一枚の中に T-REX とトム・ジョーンズが入ってたりする(笑)。でもそれをシャッフルして聴くとまたおもしろいんですよ。

【中絶】逆転があつてね、「ブライアン・デ・ホルム」に
を発見した、アルフレッド・ヒッチコックだ」とかね(笑)。でも、重松さんが言つた
みたいな並列の感覚からすれば、そうなるんだよね。それが文学にも現れた。ひ
とりいってことは、何十人もいってことですよ。

●
 [中継] 作家は生き延びると思うですよ、メディアがどう変わろうと。アナログレコードがCDになるときにいちばん売れたのはビートルズだったように、結局はアーカイヴを持ってる者が強い。だから、出版社にとってもいちばん大きな選択は、上場しなかったことだと思う。もししてたら、いちばん狙われやすいですよ。ホリエモン騒動を思い出せば、わかるよね。コンテンツいっぱい持ってる、資産持ってる、社員の給料やたらに高い(笑)。

員の給料やたらに高い(笑)。
 【解説】 村上ファンドが角川を狙いましたよね。
 【中絶】 新潮社とか文春は、上場してたらまっさきにねらわれますよ。テレビ局だって買われるんだから。出版社の上場を阻んでいるのは、じつは「作家の前借り」という制度だとほくは思うんだ(笑)。だって、株主に説明できないじゃない？ 誰とは言いませんが、前借りで家建てて、死んだ途端に更地になっちゃった埴谷雄高とかね(笑)。あれほど自作を文庫化しないってかたくなだったのに、死後すぐに講談社文芸文庫にされちゃう。でも、その文庫化した「死霊」を宇多田ヒカルが読んでるわけだから……。埴谷の“死霊”がああ世で「ぶふい！」って笑ってんんじゃないかな(爆笑)。

読んでるわけだから……。増谷「んしゃないかな（爆笑）。物語は生き延びていきますからね。だから近い将来、出版社はなくなって、物語を売る会社になるかもしれない。本は、そのうちの紙部門でつくる。百科事典がぜんぶROM化したじゃないですか、あれと同じで、出版社はコンテンツを管理する会社になるんじゃないかな。でも、編集者って絶対必要だと思うんですよ。編集者の数はいまの十分の一になり、一人が十倍の給料をもらうようになる、と。

編集者の数はいまの十分の一に減った。編集者が個人的に作家と契約するかもしれない。

【重松】 エージェント的な感じね。いまの時代「カリスマ」と呼ばれているのは、ほとんど編集者的な仕事のひとたちなんです。本屋もそれに気付けて、本屋大賞を「本のソムリエ」という言い方にしたけど、そういう感じ。ワインをつくるわけじゃないけど、お薦めする。DJもそうだし、スタイリストもそうですよね、服をつくるわけじゃないんだから。

【中野】 役目も変わるはずですね。

【解説】 本当は批評家がそういう役目をやるはずですね。『戦後短篇小説再発見』みたいな仕事だね。アンソロジーの編纂。ああいうことは批評家为建设的にやってほしい。本を歴史性のなかに位置づけること。あと世界性のなかに。作家に対しても読者に対しても、「あなたがたがいまやってることっていうのは、実はこういうひとがやってたんだ」というリンクづけだね。それは、未来の書き手や歴史なんか関係なくても少なくともリンクになるわけだね。ま、歴史なんか関係なくてもリンクになるべきじゃない？

読者を組織することになるわけだし。ま、歴史はなんでもかんでも「文壇」に閉じこめられたいわけじゃない？

のための字引をつくる。批評家は「文学検索エンジン」になるべきじゃない？

たとえば、『嫌われ松子の一生』は、「冒頭で女性が死んでその過去を追う」といって物語だよね。リンクすると、近年でいえば宮部みゆきの『火車』がある。ところどころでは、『死んだ人間が入れ替わって』というトリックだけど、そういう小説の代表作にクレーム・グリーン『第三の男』があった。さらにはレイモンド・チャンドラーの『長いお別れ』、友人が死んで探しに行ったら生きてたからそれを殺す。ツラいけど、それを裏返してるのが村上春樹の『羊をめぐる冒険』です。

て話があるんだけど、それを裏返して「死んでた」として読めば、
よね。メキシコを北海道にして、生きてたかと思ってた鼠が死んでた、となる。
もっと言えば「女性が生きてた」でいいよ。二十何人の証言で死んだ
は、有吉佐和子の「悪女について」がありますよね。十何人の証言で死んだ
女の肖像が浮かび上がる。あの小説が長すぎるという「女流」における関川夏央
の批判が明らかすぎる評価です。同じスタイルの渡辺淳一「阿寒に果つ」と比べ
てみればわかる。ただ「阿寒」の時任純子ってモラルがいて、若き日の作者は
本当に彼女と恋をしていった。やはり渡辺淳一センセは若いころから恋愛の才能
だけはある（笑）。片岡義男が訳した「チャーリー・パーカーの伝説」ね、あれ
も実話だけど多様なオラール・ヒストリーズで、証言者によって生まれた年も性格も
まるで違う。ジョージ・プリンプトンの「イーティ」とか「トルーマン・カポーティ」
とかみんなそうでしょう。まあノンフィクションは置くとして、少なくとも第2次世界大
戦以後の小説で、冒頭で誰かが死んでその過去を追うって物語では、死者が入
り替わるとか、多様な証言者の語りによる多面体になるとか、それはトリックと
いうより作者の倫理……というか、まあ最低限のモラル（節度）だよな。なのに、
死んだ女がただひたすら一直線に落ちてくだけの「嫌われ松子の一生」が、
モラルとして許されるのかどうか。映像的トリックをふんだんに使った「嫌われ松子」
の映画化作品で、明らかに原作小説への批判でしょ。宮部みゆき、クレアム・
グリーン、レイモンド・チャンドラー、村上春樹、有吉佐和子、渡辺淳一……こ
のクラスの“大衆作家”でさえ、みんなちゃんとマジメに小説のモラルを守って
んだからさ。

んだからさ。
[重松] ほんとに好きですよ、文学(笑)。

【置換】ほんとに好きですよな、又平、又平

滑稽だけど、「やあ、ジュネ」って感じだったから（中森）

(中森)

¥0

古川日出男
中森明夫＋重松清
金原ひとみ
→アルベルト・モラヴィア
山本動物
高原英理
斎藤美奈子
生田武志
上野昂志
池田雄一
桂秀実
大杉重男
大塚英志＋七字由布

楽しい文学

Wonderful BUNGA KU

【中森】今日は、こんな本もってきたんですよ。
【重松】おお、「卒業」！（「週刊本 28 卒業 Kyon2 に向か
って」）

【中森】見てよこの若者を、いまのこのオジサンと比べて（笑）。
若くて生意気だったよね、そこに、22 歳で早稲田卒のなん
か吃ったひとが現れて、「し、し、新人類はね。ぜんぜん文
学をおそれてる」と（笑）。

【重松】「小説書いてくれ」って言ったんですよ！（笑）

【中森】「新人類はなに書かない！」「しゃべってはかりいじゃ
ないか！」とか重松さんに言われて激怒ってね。当時（85
年）、若い男の書き手と言えばほくや野々村宏、田口賢司
のほかは、島田雅彦くらいだったよね。

【重松】あとは川西蘭さん（現在は政明）。

【中森】前に新宿のバーの 20 周年パーティーで一緒だったじゃ
ん？ あのととき、移動したタクシーに同乗したのが、たまたま
蘭ちゃんに中沢けいに、亡くなった鷺沢萌だったの。彼らに
比べると、ほくはデビュー遅かったな、って。全員「10 代作
家」だもん。

【重松】あのととき、中森さんが鷺沢さんに柳美里さんとの比較を
えんえん言いつづけて（笑）。

【中森】そういえば、柳美里の『八月の光』の文庫、解説を許
永中が書いてるんだよね。新潮社の編集者に聞いたら、許
永中が柳のファンだと知って頼んだらしいんだ。拘置所に手紙
を書いて、しつこく頼んで。

【重松】そのセンスって、「中森文化新聞」のセンスですよ（笑）。

【中森】許永中、名文じゃないけど文章すごくいいんだ。で、そ
のなかで柳美里のことを「典型的朝鮮美人」と言ってるの。
褒め言葉でしょ？ なのに、「週刊朝日」のほくの連載でそ
のセリフを紹介して「並みのボンニチには吐けない」って書い
たら編集部に訂正を求められて、「並の日本人」でどうす
か」とデスクが言ってます、って。

【重松】ぜんぜん違うじゃないですか。

【中森】「並みの日本人には吐けない」じゃ、ぜんぜんリズムも違
うつまんなくなっちゃうでしょう？ それで怒って、「ボンニチ
新聞社の、ボンニチ週刊誌のボンニチデスクに言っとけ！ 連
載はもう中止だ！」って。そのまま「週刊新潮」か「週刊文春」
にその原稿をもってこいかなあ……と思ったんだけど、ほくもオ
トナになったんで、まあそういうことはやめようかなと（笑）。

NAKAMORI
AKIO



中森明夫

【重松】それにしても、「東京おとなクラブ」創刊 25 周年ですね。
つまり、中森明夫 25 周年。

【中森】中森明夫と同じですからね（笑）。25 年って長いよね、さ
っきの「週刊本」つくってくれた（中野）幹隆さんも先頃亡く
なられたし。伝説の編集者なのにヤスケン（安原顕）みたい
に前へ出るひとじゃなかったから、若い子たちはみんな知らな
いんだけど。浅田彰に「中野さんがいなくな、新人類もなか
ったよね」ってメールしたら、「蓮實（重彦）さんだっけいまた
いになってなかった」って返信が来たけどさ。

【重松】ほく、じつは幹隆さんのいた朝日出版社に入社してたかも
しれないんです。ツテがあって会いに行ったら、学生時代に「早
稲田文学」に書いた島田雅彦論をめちゃくちゃ褒めてくれて、
でも「フランス語ができない奴はいらない」って（笑）。「エビ
ステーキ」も彼ですもんね。あと「角本 HEAD'S」とか。1
回目の配本、ねじめ正一（「ねじめ正一・竹中直人 芸の無
原理」）だった。「朝日レクチャーブックス」だった、いまこそ
必要でしょう。

【中森】坂本龍一が大森荘蔵に聞くとか、五木寛之と今西錦司の
対話、とか。なにより、80 年代相対主義を準備した、伊丹
十三一・岸田秀（『哺育器の中の大人—精神分析講義』）だよ
ね。

【重松】養老（孟司）さんと島田（雅彦）さんが解剖学をや、小
松和彦さんと（立松）和平さんが妖怪学をやって、中上さんと
梅原猛さんの『君は縄文人か弥生人か』もそう……。

【中森】それが「mon oncle」にも繋がって、80 年代の「ニュー
アカデミズム」を完全に準備しましたよね。ほくにとって中野幹
隆さんとの出会いは猛烈にデカかったですよ……そこに、「し、
し、新人類はね。ぜんぜん文学をおそれてる」と（笑）。

【重松】まだ言ってる（笑）。

【中森】ほくが「平凡パンチ」で中上健次と対談したあとくらいだっ
たよね。

【重松】ちょうど中上さんが「早稲田文学」の編集委員だったころ
で、角川書店に入ったらほくの「中森明夫から書下ろし
を取れ！」って。

【中森】最初に文学を感じたのが、あのとときだったんだよね。中
上の小説は読んでたけどそれで「文学」って思ったんじゃないな
くて、会ってみてはじめて感じたの。